324
61

破广禅著

禅と活動

324-61

作麼生是動。風定花猶落。作麼生是靜。鳥啼山更幽。禪與活動。話爲兩撅。說是說非。談玄談妙。魔禪子饒舌罪過。再犯難容。咄哉正眼藏向眙驢邊滅却。罪惡貫盈。人天俱憤。是爲喝采語。

無邊俠禪題

明治
40 12 25
内交

予未聞破魔禪子修禪焉。忽接其著禪與活動。始知其造詣深刻。有勝于林下衲僧十年喫麥飯之力。蓋所謂天才者乎。若夫眞參實證因地一聲之堺界。則文字言句非所能及矣。予拈痛棒待子親參于陋室。』

明治丁未初冬

洪嶽釋宗演

發凡三則

一。不立文字の教は、固より文字を以て傳ふべからず。然らば本書の著作は何の爲ぞ。著者自ら知らざるなり。

一。之を承くるところなくして、之を傳ふるところなし。讀者別に心眼を開きて、無字の書を讀め。

一。我不多讀書、難讀不能解、小人閑居時、饒舌徒增罪、鶚鴟做人言、安知意所在、根器本鈍劣、自憐蠡測海、造化無盡藏、何處求眞宰、偶檢園中梅、春風破蓓蕾。懺悔々々。

明治丁未臘月

台北竭牛庵に於て

破魔禪誌す

禪と活動目次

第一章　大勇猛心……一

宇宙の第一義……敵の牙營を衝く……流星光底逸長蛇……慧可斷臂……梁武帝……無功徳……佛陀の首筋を緊握して利刀を突込む

第二章　聖諦第一義……七

廓然無聖……最高至上唯一不可思議……浩然の氣……四十にして心を動かさず……正氣の歌……本來の面目坊……靜中より起り靜中に向つて消す

第三章　靜中動あり……二三

古池や……大欠伸する美人……鳥鳴山更幽……盥子燒庵……別有天

地非人間……閑寂に甘んずる誤解……一日爲さゞれば一日食はず
第四章　裸體になれ……二一
赤裸々露堂々……眞如と角力を取る……一人角力……汚れた衣服
……解縉……ステッセル……家庭と社會に於ける必要……顔回……
大鹽平八郎……人心生一念……長干行
第五章　言ふは易く行ふは難し……三四
地圖上の旅行……八十の老翁行ふに難し……白樂天の閉口……白
隱禪師の寢惚顔……船中に臥して大颶風を知らず……富士山の
大噴火……未曾有の大凶變……生死は時の運命……凶變を知らざ
るものゝ如し
第六章　常軌を逸するなかれ……四二
お三婆……婚姻は一生の大事……鐵箸面を燒く……血脈論……見性
を言ふて姪慾を言はず……旃陀羅も亦成佛を得ん……乞食桃水

……死者の殘飯を喰ふ……百萬圓の見舞……變物の集合……志公
和尚の藥方
第七章　禪機の大活用……五二
祖元無學禪師……大元三尺の劍……蒙古來襲……莫煩惱……獅子兒
……吾怖關東令如山……臣平時宗方寸中……大功臣……大慈父……
大孝子……禪の大活機
第八章　禪宗の大發展……五九
源平二氏の爭亂……貴族的佛教の腐敗……建禮門院の御愁歎……
……新宗教の要求……法然……親鸞……榮西禪師……道元禪師……道元
と祖元の比較論……宗教界の三分鼎立……腐つても鯛……北條氏
の宗教政策
第九章　京都の禪風……七三
祈禱佛教の衰微……仙洞御所の物の怪……妖は德に勝たず……普

門禪師の法力……龜山上皇の歸依……公卿の勝手働き……笏で飯の水加減……上皇普門禪師の像に贊す……紈袴子弟の面目一新建武中興の兆……權力富力は禪の大禁物……劍と禪との比較

第十章　建武中興以後の禪……八五

藤房と關山國師……隱遁禪……邦人の氣質……ちよいと見てちよいと惚れる腐れ緣……和歌を鞭撻に代ふ……尊氏と疎石……平等無差別……黷業の秘訣……勅願寺の御止め……山師坊主……楠公と明極……容引坊主

第十一章　禪林の一豪傑……九八

文學の生命……松竹梅の三友……國事探偵の嫌疑……白刃頸に臨む……我是關西放逐僧……勅賜號……母子の奇遇……一場の悲劇……違勅の罪……百萬の軍に勝る威嚴……我邦第一の詩人……山僧佛を嫌ふ……副將軍履を捧ぐ……大きな事なぐれ

第十二章　文字の捕虜……一一〇

幕府の奴隷……禪僧は外交係り……藝が身を助くる不仕合せ……非社會的……陳蕤漢の虎やア〳〵……藝妓の參禪……支那文學の弊害……文字のために生命を奪はる……本末の顚倒……武士の活動

第十三章　平民禪……一二三

解らないでも解つた顏……王侯將相豈種あらんや……慚愧今日紫衣僧……頂門の一針……あみだはだか物語……探られぬ所が我なり……一休の欠點……澤庵禪師……白隱禪師……消極的倫理

第十四章　武士道禪……一三五

武藝の極意……孔明馬稷を斬る……武士道と禪との相異點……亂臣賊子……兜中の二銃丸……我邦固有の倫理思想……禪と武士道と同一の弊……瘠我慢……鬼に金棒……利休の最後……名譽と禪

禪と活動目次

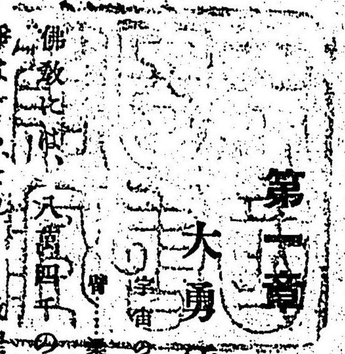
第十五章　結論……一四
木偶と同じ……贅疣駢指……バッチルスと角力を取る……禪學盡妄……不生産的の人間……活動禪の最上乘

禪と活動

第十章　大勇猛心

破魔禪

著



之を分類すれば大小權實顯密教禪聖

敎の事を研究しやうと思つても、容易に其本體の分るものではない。然し何れの宗旨でも、其最終の理想として歸着する所は、佛陀の大悟界である。大悟とは何ぞや、宇宙の第一義とする所の眞理である。此眞理は時間、空間の上に超絶し横から論じても、竪から說いても、無量、永劫、

絶對不二、一定不變のものである。尤も其名は時と場合により種々變つて、或ひは涅槃、或ひは眞如、其他法性、法界、眞諦、圓覺などゝ、一々數へ切れない。淨土宗で阿彌陀如來と名け、白蓮宗で妙法蓮華と唱へるのも、其本體は此處にある。

そこで佛教はたとへ數多の宗派に分れても、皆此大悟界に到達せんとの信仰を有つて居ることは同一である。然し其人々の機根によつて、難易の差別を生じ、隨つて說き方に種々の方便を用うるやうになつた。其方便を一切撤去して、直ちに大悟界に到達するのが、此禪宗である。

されば禪宗の要とするところは、直に大悟界に到達し得る機根が第一である。例へば旗鼓堂々、兩陣相對した時に、蓦地敵の牙營を衝き、大將の首を取ると同じである。川中島の合戰に、上杉謙信が、ただ一騎信玄の麾下に乘込み、小豆長光の一刀を以て、信玄の眞額微塵と斬り付けたのも、禪理を應用したものか知れぬ。何れにしても、非常の勇猛心がなければ、出來ぬ事である。禪によつて、直に宇宙の第一義を知らんとするのも、此勇猛心と之に相應する機根がなければ、面壁九年の座禪も何の効あるべき筈がない。

たとひ非常の勇猛心と、之に相應する機根があつたところで、大悟界に到達することは容易でない。「遺恨なり十年一劍を磨し、流星光底長蛇を逸す」と云ふやうに、折角斬付けたと思つた宇宙の第一義を取り逃すことがある。さればと云つて、それで戰爭を止めるやうでは到底モノにならない。況して宇宙の第一義、絶對の眞理は、時間空間を超絶した至大至剛のものである。之に比すれば信玄など一疋の蚯蚓と云ふても宜い。其蚯蚓さへ長蛇を逸すであるから、禪と云ふものは容易でない。古來名僧智識と云はるゝ中にも、生涯其本陣に斬り込むことが出來ず、無殘の最後を遂げた者が何千何百あるか知れないから、戰場へ顏出しをしたばかりで、臆病風に誘はれ、後を見せて逃げ出したり、亂軍の中で雜兵の手

に懸つた木葉武者は、數限りの分つたものでなからう。

然し謙信の勇猛心は、神光慧可に比すれば匹夫の勇である、殆んど兒戲と云つて宜しい。慧可は達磨が嵩山の少林寺に居る時、敎を求めんがため、積雪脛を沒する中に、終夜突立つて去らない。されど達磨は弟子にすることを承知しないので、いでや我敎を求むるの至誠を示さんと、携へて居た利刀を把つて、自ら左の臂を截斷し、淋漓たる鮮血の滴るまゝ之を達磨の前に捧げ、あはれ師父、此の如き熱誠を以てしても、御敎示を賜はることは出來ませんかと懇願したので、流石の達磨も、やアこれは感心と、向き直つて、始めて弟子とした。慧可の利刀は、自ら片臂を截斷したばかりではない、直ちに達磨の橫腹を抉り拔いたものである。此勇猛心は謙信などの匹夫の勇に比して、到底同日の論にあらずだ。さうかと思へば、達磨の勇猛心は、更に一層勝れて居る。梁の武帝が「朕はこれまで多くの僧尼を度し、多くの寺院堂塔を建てたが、如何なる功

德がある』と問ふた時、達磨はたゞ一語『無功德』と喝破した。無論武帝の心中では、無量の大功德で御座り奉ると、大ひに褒めらるゝつもりで云つたところが、無功德といはれて失望し、定めて御機嫌を損じた事であらう。これが武帝だから、御機嫌が惡いだけで濟んだが、兎に角、生殺與奪の權を握つて居る、天子の身として、外國から漂泊して來た一禿顧に、折角の自慢を一言に喝破され、侮辱を受けては、如何なる大事になるか分らぬ。ソレと一聲の下に、數多の臣下が驅け集つて、此大不敬漢と罵りながら、達磨を地上に曳摺り下し、其頃の支那であるから、刀鋸鼎鑊の慘刑に處せられぬとも限らぬ。そこを平氣で無功德と喝破した勇猛心は、流石の達磨である。

されば禪家の本領として、此勇猛心と之に相應する機根がなければならぬ。宇宙の第一義に向つて、慕地刹到し、佛陀の首筋を緊握して、利刀を突込む勇氣が必要である。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を

殺し、羅漢に逢ふては羅漢を殺し、父母に逢ふては父母を殺し、親眷に逢ふては親眷を殺し、始めて解脫を得、物に拘はらず、透脫自在なりと云ふことも、此處にある。

昔或る儒者が、門弟を集めて講義の席に、若し支那から孔子が大將となり、顏回、孟軻が左右の副將となり、大軍を率ゐて、我日本を取圍んだ時はどうすると問ふに、數多の門弟が、鳩が豆鐵砲を喰つたやうに、目ばかりパチクリ、一人も答へ得るものがなかつたとか、そこで師たる儒者が、其時は顏回、孟軻の首を刎ねて、孔子を捕虜にする覺悟で、飽まで闘ふ、これが即ち孔子の道であると云つたとか。隨分馬鹿げた話ではあるが、何の教でも名目や形式の末に拘泥すると、何れも此等門弟と同一の阿呆になつて、何事も手足が出なくなる。そこで禪は名目形式の外に超絶した浩瀚々地のもので、大勇猛心の大作用を要する所以である。

第二章

聖諦第一義

廓然無聖……最高至上唯一不可思議……浩然の氣……四十にして心を動かさず……正氣の歌……本來の面目……靜中より起り靜中に向つて消す

梁の武帝が達磨に對して『如何なるか是れ聖諦第一義』と問ふたところが、達磨は『廓然無聖』と答へた。此聖諦第一義とは、即ち前章に述べた佛陀の所謂大悟界である、絶對不二の本體である。八萬四千の法門も、根本の基礎はこゝにあつて、其歸着するところの最終理想もこゝにある。第一義と云へば、最高至上唯一不可思議のものであつて、言語文字の形容し得べきところではない。止むを得ずして、眞如とか、涅槃とか、種々雜多の名目を附けて置くが、到底適當のものではない。場合によりては之

を佛陀と稱し、阿彌陀と唱へ、人格的に尊崇するのも一の方便である。神道者流は、之を天御中主神と云ふであらう。耶蘇教徒は之をゴットと稱するであらう。儒者は之を天と云ふであらう。老莊學者は之を谷神と云ふであらう。孟子が『我善く吾浩然の氣を養ふ』と云つたのも、こゝに憧憬した語である。されば何をか浩然の氣と云ふと尋ねられて『曰く言ひ難し』と答へた。言ひ難しの一言は、實に能く言ひ盡してある。之を強て說明しやうとすると無理が出來る。『其氣たるや、至大至剛にして、以て直養して害することなくんば、則ち天地の間に塞つ』と云つた其語の中に、天地の間に塞つとは、もう打毀してしまつた。若し浩然の氣が絕對不二のものであれば、斯う云ひ詰められるものでない。けれども孟子が『我四十にして心を動かさず』と云ふ大勇猛心を確立した原因はこゝにある。文天祥が正氣の歌を作つて『下は則ち河濱となり、上は則ち日星となり、人に於て浩然と云ひ、沛乎として蒼冥に塞ち……是の氣の磅礴する所凜烈

として萬古存す、其の日月を貫くに當つては、生死安んぞ論ずるに足らん、地維賴りて以て立ち、天柱賴りて以て尊し』と云つたところが、基いて、文字の間に跼蹐したところはあるが、所謂宇宙の眞理に接觸して、大勇猛心を發揮したものである。

さて此聖諦第一義、即ち眞如の本體は如何なるものぞと云つたところが、曰く言ひ難しだ。達磨が廓然無聖と云つたのも、それより以外下すべき語がないからである。そこを捉へて、自分のものにして活用させるのが、禪の働きである。

他の法門では、名目形式の袈裟に絆られ、敎相判釋の法衣に掩はれて、眞如の本體も、奥殿に閉籠り、それ〴〵順序手續きを經た上でなければ、お目に懸ることが出來ないが、禪の方では素裸で突立つて居る。本來の面目坊の立姿と云ふのはこれだ。

ところが此本來の面目坊、目にも見えなければ手にも觸れない、聲もな

ければ臭もない。いくら謙信が小豆長光の一刀を振廻はして見ても、手應へのあるものでない。眞の空々寂々、何もないかと思へば、八萬四千の法門が生み出された根本はこゝにあるので、決して無いものではない。唐の韋應物の詩に斯う云ふのがある。

萬物自生聽。太空恒寂寥。還縱靜中起。却向靜中消。

これは聲を詠ずるといふ題で作つたものだが、空々寂々の眞如が土臺となつて、八萬四千の法門を生み出し、それが又眞如の一に歸着するところは、所謂靜中に向つて起り、靜中に向つて消滅すると同じである。イヤ消滅と云つては語弊がある。眞如の本體中に攝取せらるゝのである。眞如に出でゝ、眞如にかへるのが、宇宙の原則である。吾人々類は勿論、禽獸草木山川國土の森羅萬象が、眞如を本體として、其處に相對の關係が生じて來る。悟に對する迷、涅槃に對する生死、安樂に對する苦界、眞善美に對する僞惡醜などゝ云ふもので、眞如本來の面目を失つてしま

う。孟子が『人の性は善なり』と云ふに對し、荀子が『人の性は惡なり』と云つて、其見解を異にしたのも、眞如の本體が分らないためであつたが、禪に於ては赤手驀進、其本體を捉らへるのが、第一の要義で、之を稱して直指人心、見性成佛と云ふて居る。吾人が凡夫として賤められ、僞惡醜の業障を受け、生死の境に臨んで、恐怖畏縮するのは、眞如の本體を掩はれて居るからだ。之を跳出して本來の面目に立戻れば、忽ちにして眞善美の佛陀となり、涅槃の安樂界に到達することが出來る、こゝが即ち聖諦第一義であらう。だが達磨の所謂廓然無聖、孟子の曰く言ひ難しであるから、吾人の筆舌を以て、到底形容することは出來ない。

海空　大鑑禪師

學道若觀海。廣深須盡窮。波濤千種異。溟渤一漚同。
湧去兼天遠。縮來連底空。珊瑚枝上月。呑却水晶宮。

大鑑禪師諱正澄號清拙福州人嘉曆元年來住于鎌倉建長寺

第三章

靜中動あり

古池や……大欠伸する美人……鳥鳴山更幽……婆子焼庵……別有天地非人間……閑寂に甘んずる誤解……一日爲さゞれば一日食はず

禪は禪那と云つて、靜慮の義であるから、其本旨は閑寂に歸すと云ふ者がある。座禪の三昧に入つて、宇宙の眞理を參究する時に於ては、寂然不動、枯木寒巖に倚る底のものであらう。然し靜中動ありといふのが禪の本旨で、たゞ閑寂一方に偏じてはならぬ。

古池や蛙飛び込む水の音

古池だけに古い譬ではあるが、靜中動ありの妙趣を、云ひ現はしたものとしては、これほど適切の言葉は外にない。又俳人一茶の。

春雨に大欠伸する美人かな

などゝも靜中動ありとして、頗る警句である。

安石が。

鳥鳴山更幽

と云ふ唐人の詩句も、箇中の消息を道破したものであるが、之を宋の王安石が。

茅簷相對坐終日。一鳥不鳴山更幽。

と燒直したのは禪の妙趣を知らぬと云つても宜かろう。寂々たる山中に、何か分らぬ鳥の鳴くなどは、物淋しさが、一層增すものである。然るに安石の句のやうに、一つの鳥も鳴かぬとすれば、山更に幽なりと云はず閑寂一方に偏しては、枯木禪、死灰禪に墮して、たとへ幾分か悟入するところがあつても、何の役にも立たない。そこで婆子燒庵の公案が出來た。如何に禪宗坊主でも、人間は人間である。妙齡の女子に抱擁せられて『正當恁麼の時如何』と問はれながら『枯木寒巖に倚つて三冬暖氣無し』とは、

全く死人も同様である『二十年來只此俗漢を供養したり』と罵つて、老婆が其坊主を追ひ出し、草庵を燒拂つたのも無理はない。追ひ出された坊主は、恐ろしい無情の老婆があつたものだと、怨んだか知れないが、こんな役にも立ぬ坊主に、二十年も無駄飯を喰はれた老婆も、さぞ口惜しかつたらう。

禪家の活作用は、機に臨み變に應じて、端倪すべからざるものである。禪の本領は、赤手を以て、直ちに佛陀の咽喉を締め付るものである。到底尋常の手段では不可。されば端坐靜慮の中に、迅雷風烈の大作用を心懸けて置くのが肝要で、靜中動ありと云ふも、之がためである。一鳥鳴かず山更に幽なりと、石地藏を抱いて居るやうな枯木的死灰的、閑寂一方に偏した禪は、禪としての價値がない。

更に翻へつて考へれば動中靜ありで、苟も禪味を解したものは、紅塵萬丈、車馬喧囂の熱閙場中に坐し、牙籌を握り、錙銖を爭ふ時にも、閑室

に坐して靜慮すると等しき餘裕がなければならぬ。古人が『能く熱地に於て冷を思へば、則ち一世凄涼を受けず、能く淡處に於て濃を求むれば、則終身枯槁に落ちず』と云つたのも、動中靜あり、靜中動ありの妙趣を道破したもので、禪の作用と同じてある。李白の詩に。

問余何意栖碧山。笑而不答心自閑。桃花流水杳然去。別有天地非人間。

と云ふ中にも、此の妙趣を寓してある。何の意あつて碧山に栖むと問ふ者は、箇中の消息を知らぬ門外漢であらう。達磨の最初神光慧可に對して、ケンモホロヽに取合はないのも、李白が笑つて答へないのも道理は同一である。而も心は自ら閑にして、幽靜を樂む中に、桃花流水の杳然として去るところが、即ち靜中動ありの妙で、若し此の一句を除いて、前後の三句を讀んだばかりでは、三文の價値もない、くだらぬ詩となつてしまう。更に禪理の上から、別に天地の人間に非ざるありを解釋すれ

ば、靜慮して、天地微妙の神機に觸れ、人間即ち凡夫の境界を解脫したものと云つて宜からう。されば此天地は尋常の天地ではない、宇宙の第一義を悟了したもので、其快樂は如何ばかりであるか。實に手の舞ひ足の踏むところを知らぬ程であらう。哀しいかな吾人門外漢には、此快樂を味ふことが出來ないで、五障の罪惡に苦められ、煩惱の塵衢に彷徨して居る。尤も李白が此詩を作つた時、別に禪理から割出したのでもなからうが、天地自然の眞理は、古今東西に亘つて、一定不變のものであるから、禪を知らぬ李白でも、その高尙の思想は、此二十八字に發して、自ら禪の趣味と合するに至つたものである。數多ある李白の詩中、この一首が最も人には膾炙せられて、詩仙の稱を受けたるも無理はない。王翼雲と云ふ男が、之を評して、『手にまかせて拈し來り、字々化に入り段落の蔣ぬべきなく、特に其意を會すべくして、必ずしも其辭に拘はらず』と云つて居るが、實に文字語言の外に超脫し、天地自然の神機に觸れて

居るところが、所謂『一字を着けず、悉く風流を得たり』と云ふもので、禪も詩もこゝに至つて、契合一致する。何れにしても無念無想の中に、神機の流動するのが、肝要である。

然し百尺竿頭更に一歩を進めて考へれば、李白が碧山に住んで、別に人間以外の天地を求めやうといふのはまだるい話である。たとへ碧山の中に住まないでも、其の心の持ちやうによつて、金殿玉樓の上に坐しても碧山である。彈雨砲烟の中に馳驅して居ても碧山である。絲竹喧嘈の歌舞場裡にあつても碧山である。九尺二間の裏店に冷たい膝を抱へて居ても碧山である。快川和尙が烈焰の中に坐して『安禪必ずしも山水を須ゐず。心頭を滅却すれば火も亦涼し』と云つたことを深く玩味して見れば、白刃我頸に臨み、砲丸我胸を貫く時も、亦碧山に栖んで笑つて答へざるの覺念になれるであらう。況んや行住座臥の平生にあつてをやで、一たび其悟境に到達すれば、天下何物も恐るゝものはない。

以上の說によつて見ても、禪は閑寂一方に偏すべきものでない。無念無想の中に活潑々地の神機が流動して、イザと云ふ場合には、獅子奮迅の勢を以て、天魔の膽を奪ふべき大威力を逞うすべきものである。然るに世には、禪と云へば、閑寂の境遇に甘んずるものと思ふ者がある。これは禪の活機を知らぬ誤解より來る思想で、到底聖諦第一義の妙旨に契合するものでない。此誤解より來る禪徒は、沼々たる天下皆是で、これから世間へ出て、大に働くべき有爲の青年が、少しばかりの禪を修して、厭世的觀念を惹起し、槁木死灰の狀態に陷つてしまうものが多い。而も

一箇半箇なりとも、人を益し、自ら益するところがあれば宜いが、徒らに座禪三昧に入りて、石地藏と伍をなすは、華嚴の瀧壺に飛び込み、淺間の噴火坑に投じて自殺を圖る者と同一である。

近來禪學々々と云ふ聲が、世間に反響して、大分流行るものになつたが、動もすると斯ういふ氣紛れ者が飛出し、精神的自殺を遂げて、自分ばかりか、二父母兄弟親戚朋友に迷惑を懸けることがある。現に余が知友の中にも、其嗣子たる某が、昨年來禪に凝つて、勤むべき家業を勤めず、修むべき學課を修めず、今日は何寺で參禪、明日は某師の提唱と、浮かれ歩き、果は其父に强請して、閑地に庵室を作り、獨り別居せんと企てゝ居る。尤も悉多太子が迦毘羅城を拔け出して、難行苦行の末、三界の大導師となり、世間の衆生を、生老病死の煩惱界より救ひ出した例もあれば、某も之に倣ふつもりか知らねど、直指人心、見性成佛の此法門にあつては、其機根次第、直ちに佛陀の境界に至れるもので、別に家を棄て、

親兄弟の意に違ふに及ばず、修業はいくらでも出來るものである。百丈惠海の作つた清規にも『一日爲なさゞれば一日食はず』と立派に記してあつて、たとひ僧侶の職務としても、又士農工商各自の仕事としても、人は一日の中に、何かそれ〳〵働かなければ、其日一日は食はないで居ろと云ふ嚴重の規則を立てゝ置いた。世の中に遊手徒食の身ほど恥づべ

きことはない。出家の身としても、百丈は斯くまで心懸けて得るところが、實に有難いものである。而も今日我邦の禪林に於ても、此清規に掲げ、遊守すべき筈であるが、遊手徒食は此社會に於て當然と心得るやうになつて居る。實に歎息すべき事ではないか。

然し僧侶は僧侶として、習慣上暫く寛假しても、前途有爲の少壯なる人々が、生噛りの學に凝つて、世務を廢し、家事を厭ふやうでは、却つて百丈の罪人、禪林の蠹賊となるであらう。

不立文字　承陽大師
いひすてしその葉の外なれば
ふでにも跡をとゞめざりけり

座無所住而生其心
水とりのゆくもがへるもあとたえて
されどもみちは忘れざりけり

第四章

裸體になれ

赤裸々露堂々……眞如と角力を取る……一人角力……汚れた衣服
……解繩……スデッセル……家庭と社會に於ける必要……顚回……
大燈平入郎……人心生一念……長干行

禪は元來不立文字、敎外別傳を標榜して、自己の心即ち眞如なり佛陀なりと自覺するものであるから、理窟は一切ぬきとして、文字言語の末に拘泥する必要はない。イヤ必要がないどころか、之を一掃して赤裸々露堂々となり、直覺的に感受する所がなければ、其妙味を解することは出來ぬ。

或人が云ふに、禪と褌と云ふ字は其形の似て居るのみではない、一體禪は名目、形式、文字、語言の衣服を脫いで、極一つのまい角力を取る覺

悟でなければならぬと、これは中々面白い話である。然し禪どころか、赤裸々一絲を繋けずの狀態に至つて、始めて宇宙の第一義たる眞如と角力を取るのである。眞如は元より赤裸々のもので、我を相手に四股を踏みつゝ、いつも土俵の中央に突立ち、待ち受けて居るものである。

更に根元を探つて見れば、眞如は我の本體である。我は眞如の分家である。本家分家どころか、眞如は唯一不可分のものであつて、我は即ち眞如、眞如は即ち我である。盜人を捉へて見れば我子なりと云ふ諺がある が、眞如を捉へて見れば我即ち眞如で、實に馬鹿々々しい譯と云はなければならぬ。今まで相手にして角力を取らうとした眞如も、勝つてしまへば、一人角力を取つて居た事が分る。我即ち眞如であるが、眞如が表面を名譽、財產、生命、其他諸慾の衣服に纏はれ、肝心の本體を隱して居る吾人凡夫は、實に憐むべきものである。自分の物を自分で隱して置つて、他所を探したところが見當る筈がない。そこで先づ名譽、財產、

生命なぞいふ汚れた衣服を脫いでしまはなければならぬ。それから次に文字語言の末に拘泥した一切の理窟といふ衣服を脫いで、本來の無一物となつて、始めて『はゝあこゝにあつたか』と氣が付くのである。

されば吾人は勿論一切の衆生が、眞如を以て本體として居るが、名譽、財產、生命等其の他諸慾の衣服に包まれて、本來の佛陀も、凡夫の淺ましい境遇に沈んで居るので、之を一皮々々に脫いでしまへば、又元の佛陀になれるのであるが、誰しも名譽は慾しい、財產は慾しい、生命は慾しい、木綿物でも寒暑を防ぐことは出來るが、ならば絹布にしたい、銀側の時計では巾が利かないから、金側を買いたいものだ、鰻飯はもう飽きたから、今度は西洋料理にしてやらう、それには少し懷中の都合が悪い、彼奴を騙して、金を出させやう、過般新橋で見た藝妓は中々別嬪であつたが、もう一度顏を見たいものだ、母親の臍繰を絞る算段がありさうなものだ、己れも漸く區會議員になつたから、次は府會

議員となつて威張りたいが、彼の老爺を叩き落す工夫はないか知らんと云ふやうな、小さい望みでも、それ相應の罪惡を作つて、自ら人の前に頭を下げたり、諂ひ笑ひをしたり、自由の精神、自由の身體を、強て不自由にして、彼奴は金を貸さなかつた憎い、彼奴は己れを突き落して、とう〳〵當選しやがつた怨めしいと、煩悶懊惱の苦しい目に遇ふのである。それより以上の大きい罪惡も矢張基くところは名譽、生命、財産、其他物質上の諸慾で、人間社會の嫉妬、憎惡、怨恨、陰險、邪惡、奸佞、驕奢、淫逸、闘爭の諸罪惡は皆こゝから出て來る。殊に執着の甚しいのは生命の慾望である。七十八十の齢まで、無事息災に生き延びた者でも、死を嫌ひ、生を喜ぶは普通の人情であるが、死すべき時に死せざれば、死に勝るの恥ありで、何程惜しい生命でも、其時機が到達した時、猶此娑婆に執着するやうでは、立派の人間と云はれない。死すべからざる時に、自ら生命を縮めるも、一の罪惡であると同じく死すべき時に死すべ

き覺悟のないのも罪惡である。明の建文帝に仕へて居た解縉と云ふ男は、文學を以て名聲を博した人物であるが、建文帝の叔父燕王様が兵を起して、帝位を奪つた時、解縉は友人の周是修と共に國難に殉ずる約束をしながら、生命の惜しさに約を變じ、周是修一人を殺させて、自分は燕王即ち成祖に仕へ、官祿を受けた。而も池酒蛙々々と鐵面皮にも、周是修の傳を作つて、其子に對ひ、吾をして死せしめば、誰が汝の父のために、佳傳を作らんと云つたなどは、滑稽至極の事として、後世まで物笑の種になつて居る。趙宋の趙孟頫、明の錢謙益なども、支那歷代を通じて、屈指の學者でありながら、死後に醜名を流したのは、皆死すべき時に死する覺悟がないためである。其他東西の歷史に就て數へ立てれば、斯う云ふ人物は際限がなからう。近くは旅順に籠城して、其當時世界萬國に良將の名を轟かしたステッセル將軍なども、欠く所唯一死で、今は氣の毒の有樣となつた。死は一旦にして易しとか、一死鴻毛輕しとかいふ事

は。昔から能く人の云ふ事であるが、イザと云ふ場合には中々容易でない、其處を潔く覺悟して、死を視ること歸するが如しとなるのが、人生の最も必要なところである。尤も太平無事の世に生れて、文明の恩澤を蒙むり、工となり商となり農夫となつて、世を送る者に、そんな覺悟は要らぬと云ふ人もあらうが、これは大層間違つた話である。生きて居るものは晩かれ早かれ、一度はこの死といふものに出遇はなければならぬ。其時に臨み從容として慌かず、眞如の本宅に復歸する覺悟を平生に於て養つて置く必要がある。況して擧國皆兵の制度で、列強雄を競ふの現世界に住んでは、一旦緩急あつて、義勇奉公の大義を守らなければならぬ。死に就いての覺悟は、各自々身に必要があるばかりではない。親子兄弟姉妹親戚朋友の中に、死者を出した時、此覺悟がなければ、哀號慟哭の結果、業を廢し病に臥す者も出來るであらう。其場合に之を慰撫し、之を說諭して、各自の安心を得せしむるは、家庭に對しても、社會に對し

ても、最も緊要の事である、而も自ら會得するところがなければ、他を開諭する能力がないであらう。妻を失つた男が俄に放蕩を始め、子に別れた母が悲歎の結果、自殺を圖るなどは、毎日の如く社會に實例のあることである。これらを開諭慰撫して、安心を得さしめんとしても、其時に臨んで一朝一夕に悟了せしむることは容易でない。又年に一回二回、菩提寺の和尚から、無常觀の說法を聽かせられた位で、安心を得らるゝものでもない。是に於て家庭の長者が、尋常茶飯の談話として、間斷なく其思想を涵養する必要があるであらう。

此の如く人間社會は、名譽、生命、財產等の諸慾に捲付かれて、始終ヤッサモッサの騷動が絶る時はない。其處を超脫して、直ちに本來無一物の狀態に立戻るのが禪の本領である。

さて此の赤裸々の無一物になるのが、容易の事でない。湯屋の板の間へ、着物を脫ぎ棄てるやうに往くものでない。而も其目的とする所も本來空

で、智識、學問、文字、語言の外に超絶したものであるから、科學的の順序を以て、學習體得することは出來ぬ。

本來空とは何であるか、眞如の實體、達磨の所謂廓然無聖であらう、無と呼び虛と呼ぶも宜からう。名目は何でも其時の付けやうでどうにもなる。但無と云ても有に對する双對的のものではない。虛と云ても實に對する双對的のものではないと云ふ事は心得て置かねばならぬ。本來が絶對無限、不變不動のもので、裏もなければ表もない。頭もなければ尻もない、時間、空間に超絶して、廣狹、大小、高低、剛柔、強弱などゝ云ふ双對的の語を以て測度すべきものでもない。其無より有を生じ、虛より實を生じ、空より色を生じて、日月、星辰、山川、國土、禽獸、草木、等の森羅萬象を現じ双對的のやうにも考へられるが、これは大なる誤認で、空即色、無即有、虛即實で、表裏のあるものではない。さアこゝまで悟つて來ると、それ〳〵帶を解き裸體になりかけたものであらう。

そこで此本來空を悟るに就ては、此方も赤裸で押懸ける。何か挾持するところがあれば、もうギッチリ、バッタリ行詰へて、頭を出すことは出來ない。

これは佛敎ばかりではない、儒者(敢て宗敎と云はずとも)のはうでも、箇中の消息を傳へて居る。論語に『孔子曰く回や其れ幾からんか、屢々空し』と云つてあるのが其一例だ。顏回は孔子の門下に於て、第一の高足、亞聖即ち聖人に亞ぐべき人物と稱へられて居る。其れ幾からんかと云へば、殆んど宇宙の眞理即ち自然の大道を悟つて居ると賞美したのである。顏回がどうして、そんなに褒められたと云へば、屢空しである。さあ此屢空しが、やかましい議論だ。別のところで、孔子が『賢なるかな回や一簞の食、一瓢の飮、陋巷にあつて、人は其憂に堪えず、回や其樂を改めず、賢なるかな回や』と褒めてあるので、此屢空しも大方貧乏で、米櫃が度々空虛になる事だらうと解釋して居るのが古來多數だ。朱子などがあれ程

の學者で矢張りさういふ註釋をしてる。ところが陽明學者として、天保の饑饉に、窮民救助の事から、我身を犧牲に供して大活劇を演じた大鹽平八郎即ち中齋先生が、大虛説と云ふのを唱へ出して、其中に此の顏子の屢空しを以て、大虛に歸することであると云ふ解釋を下してある。これは至極道理の議論で、米櫃がカラ〳〵になつたぐらいに、孔子が其れ幾からんかと褒めちぎる筈がない。それで亞聖になれるなら、著者などは立派の亞聖で、孔子の後繼ぎが出來るであらう。大鹽の大虛説は、禪の本來空に似て、未だ説の盡さゝるところもあるが、顏回の屢空しに着目したのは達見である。ところが此頃洪嶽禪師の説いたところを聞くと、此の屢空しを以て『決して米櫃が輕いと云ふ譯ではない、祿に圭角のない平心坦懷と謂ふことで、これが中々出來ない、顏回は立派なものであつた』と達磨の『大道は虛懷を本となし、不着を宗となす』と云ふ語を引いて、解説してある。然し顏回も屢空しであるから、亞聖の地位に止まつてし

まつた、汽車の乘客なら二等の青切符で、まだ聖人の一等室に這入れない。聖人になるには常に空しでなければならぬ。何千年といふ長い間米櫃がガタツクとばかり輕蔑された顏回が、俄に一等乘客ともなれまいが、これで大に相場が狂つて來た。

此の如く儒者のはうでも、禪のはうでも、虛懷即ち一切の物を擲去して、眞の裸體とならなければ、道の至極を窮むることは出來ない。さうして裸體になれば、それが直ちに眞如である、佛陀である、儒教の所謂天である、邵康節の詩に。

天聽寂無音　蒼々何處尋
非高亦非遠　都只在人心
人心生一念　天地悉皆知
善惡若無報　乾坤必有私

とあるのも、此處の道理で、天即ち眞如の本體は、聲もなく臭もなく、

何處にあるか分らないが、左程遠いものではない。人々の心の中にあるどころではない、心其まゝが天である。非常に遠く手の屆かないものと、斷念めて居るのは大變な間違ひ、たゞ一念發起して、之を求めやうとすれば、其心直に天と現ずるので、知るも知らぬもあつたものではない。コヽで天地と云ひ乾坤と云ふのは、何れも天即ち眞如の本體で、直指人心、見性成佛の妙旨を取りながら、知らぬ顏をして居る邵康節も、中々横着な男である。唐人崔顥の長干行に、

家臨九江水。來去九江側。同是長干人。生小不相識。

と云ふ詩があるが、我が心と眞如との偶合も之と同じで、妾も郎も同じ九江の側なる長干の里に住んで、今まで顏も見知らないで居たとは、何如にも馬鹿らしいことで御座いました。早くお目に懸つて、早くこんな仲になつたら、どんなに嬉しいことで御座いましたらうと、後悔しながらも、大歡喜の狀態にあるのは、赤裸々になつた後である。

されば何人でも、此大歡喜の境遇に至らんとするには先づ裸體になれ。

坐禪の要術

道元禪師撰普勸坐禪儀節錄

夫れ參禪は、靜室宜しく、飲食節あり、諸緣を放捨し、萬事を休息して、善惡を思はず、是非を管すること莫れ。心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて、作佛を圖ること莫れ、豈坐臥に拘らんや」尋常坐處には、厚く坐物を敷き、上に蒲團を用ふ、或は結跏趺坐、或は半跏趺坐」、謂く結跏趺坐は、先づ右の足を以て、左の腔の上に安じ、左の足を右の腔の上に安ず。半跏趺坐は、但左の足を以て、右の腔を壓すなり。寬く衣帶を繫けて、齊整ならしむべし。次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安ず。兩の大拇指面へて相拄ふ。乃ち正身端坐して、左に側ち、右に傾き、前に躬り、後に仰ぐことを得ざれ。耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す。上舌は顎に掛けて、唇齒相着け。目は須く常に開くべし。鼻息微かに通じ、身相既に調へて、欠氣一息し、左右搖振し、兀々として坐定して、箇の不思量底を思量せよ。不思量底、如何か思量せん、非思量。此れ乃ち坐禪の要術なり。

第五章

言ふは易く行ふは難し

地圖上の旅行……八十の老翁行ふに難し……白樂天の閉口……白隱禪師の寐惚顏……船中に臥して大風を知らず……富士山の大噴火……未曾有の大凶變……生死は時の運命……凶變を知らざるもの〻如し

たゞ裸體になれと云つたばかりでは、餘り呆氣ない。それで成佛の本願を達すれば、禪も實に容易いものであるが、口で云ふとは千里萬里の相違がある。地圖を擴げて、それ此處が亞米利加だ、今度は大平洋を飛越して、濠洲へ行かう、濠洲と亞弗利加はタッタ八寸程だと、彼地へ飛び此地へ飛べば、五大洲の旅行も造作もないが、イザ實地に世界漫遊をやらうと云ふには、地圖の上の旅行とは同日の話ではない。禪

も口だけなら、直に大悟徹底したやうな事が云へるが、眞の大悟界に達するは吾人の思ひ寄らぬ事である。

鳥窠禪師であつたか、一寸忘れたが(參考書を出すのが面倒だ)白樂天に『貴僧の道とする所は何だ』と問はれ『イヤ何でもない、君等の說くところの、君には忠、親には孝、子には慈、夫婦の間には愛の道を敎へるのサ』と云ふやうな事を答へた。樂天は不審の眉を蹙めて『そんな事は三歲の小兒も知つて居るではないか』と云つた禪師は呵々と大笑して『三歲の小兒知ると雖も、八十の老翁も行ふに難し』と、流石の博學多才の白樂天も、是に於てグーの音も出なかつたといふ事が、何にか書いてある。

成程誰でも知つて居る事だが、誰にも行へるものではない。不忠不孝不慈不貞の人間は、今も昔もヴヂャ〳〵居る。何百年何千年の後に種切れになるものやら、先づ當分見當は付かない。これから考へても、言ふは易くして行ふは難い。況して禪と來ては、語言文字を以て解釋すること

の出來ぬ微妙不思議のものであるから、其實行はます〳〵難いに相違ない。何寺の何禪師で御座る、何管長で候と、立派の袈裟法衣を纏ひ、達磨大師其まゝの悟りを開いたやうな顏をして居る和尙樣方でも、生死關頭を解脫するどころか、金が慾しい名譽が慾しいと云ふ娑婆の汚れた衣服を脫いで、赤裸々になれたものは容易に見當らぬ。生命を奪らるゝ氣遣ひのない、禪堂の中にこそ富士山が頭の上に崩れかゝらうが平氣さうな顏をして居るが、白刃を首頸に押當られ、さアどうだと云はれて泰然自若たる者は、澤山あるものでない。

白隱禪師などの力を得たところは又格別、隻手の聲を以て、海內を風靡したゞけの事はある。禪師が二十三歲、まだ靑道心の時に、三人連で、播州の一山寺から兵庫へ往つた。其途中一人は病氣、一人は旅疲れで、荷物を擔ぐ力がないため、禪師は己れの分と都合三人の荷物を背負ひながら、步々無字を參詳し、漸く兵庫に着て舟に乘つた。其夜は月明昼の

如く、海も靜かで、瑠璃盤上に金波の閃めく風景を賞しつゝ、何時の間にか鼾聲雷の如く熟睡し、暫く經て目を覺せば舟は依然として動かない。禪師は寐惚眼を擦りながら『オイ船頭さん、まだ舟を出さないのか、何時まで何を逡巡して居るのだ、夜が明けてしまうよ』と云へば、船頭は大に立腹して『ヤイ〳〵此の寐惚助、何を云つて居る。昨夜兵庫から揃つて出た十幾艘の船が、難風に遭つて大概顚覆してしまつて、船頭も客も今頃は鮫や鯨の餌食だ。此船ばかり幸ひに助かつたが、大山のやうな浪が、頭から崩れ懸つて、到底助かるまいと思つた位だ。それでも御客樣が一生懸命に、大神宮樣や金毘羅樣を信心してよ。髭毛を切つて、海へ投込み、龍神樣に奉納して下すつたお陸で、漸く無事に此大阪まで來られたのだ。これ見ろをいらの頭も、此通り髭がないや。大勢のお客樣が泣いて騷ぐ中で、お前はグー〳〵高鼾、漸く命拾ひをして、舟を着けたところで、舟はまだ出ないかとは何の事だ。寐惚けるも好い加減にして、顏

を洗つて來い、此のづくにふ奴、をいらも今まで二三十年此稼業をして居るが、お前のやうな大膽の坊主を見た事も聞いた事もない、はんとうに呆れてしまつた』と怒鳴り付けられ、禪師はニコ〳〵『おゝさうか更に知らなかつた』と左右を見廻はせば乘客はまだ餘暈に惱まされて、頭痛がすると見え、鉢卷をして呟々、呻吟の聲高く、半死半生の體で、甲板は嘔吐狼藉、足の踏みどころがない。船頭の立腹したのも、今更無理でないと思はれた。

此一例によりても、禪師が非凡の人物であつた事が分る。たゞ非凡の人物と云ふより、氣海丹田から錬上げた禪修の力によつて、生死關頭無念無想の境遇に達したものでなければ、斯うは往くまい。

大鹽平八郎も亦琵琶湖の舟中で、難風に遇つた事が洗心洞劄記に見えてある。然しこれは眼が覺めて居て、生死の運を、天にまかせ、自己が學問上より力を得たといふ狀態を述べたもので、文字の間に幾分か、恐怖

と自負の痕迹が現はれ、禪師の『知らず識らず帝の則に從ふ』と云ふべき無念無想とは、大に逕庭がある。

然しこれは寐坊だと云つてしまへば、それまでゝあるが、矢張其年の冬、郷里駿州の原に歸つて居る時、富士山の大噴火で、今も紀念として殘つて居る寶永山が新たに吹き出した際、禪師が泰然自若たる有樣を聞けば、確かに生死關頭に透脫したる大力量が、證明されるから、左に其光景を述べやう。

頃は寶永四年の十一月、富士の内輪より烈焰を噴出して、一大火柱蒼空を焦すこと數日、山川鳴動して日月晦冥、火勢囘つて、東の山腰に迸り出で、忽ち無底の火坑を現じ、畑は揚つて萬疊の雲を起し、數千の燭龍雲中に相鬪ふが如く、數十里を隔つる常野房總の地までも、灰砂を降らせ、箱根の路も壅塞せられて、後日新たに開鑿したと云ふくらゐである から、東山麓の數々村は、熔巖燒石のために、田園家屋人畜等悉く埋沒

せられ、古今未曾有の大凶變であつた。禪師の居住せる原の松蔭寺も、富士を頭上に仰ぐところで、燒石燒砂は雨の如く降り注ぎ、堂屋の鳴動潰倒したものが數知れずわつた。村民は勿論、寺の僧侶僮僕も一同郊外に走り出で、號哭叫喚の聲を揚げ、修羅の巷を現出したる中に、禪師一人寺內にあつて、結跏趺坐、三昧に入つて動く氣色なく、族兄古關某が見るに見かねて寺內に驅け込み『慧鶴坊々々、早く逃げないと、此寺諸共押潰されるぞ』と云つても、大磐石の如く『死ぬも生きるも時の運命で、少しも恐るゝところはない』と再び口を開かず、無念無想の境に入つたので、古關某も手の附けやうなく、其中自己の身も危いと思ひ、禪師を棄置き逃げ出してしまつた。禪師は遂に富士山の噴火が終るまで坐禪をして、斯る凶變に際し、殆んど知らざるもの、如くであつた。其大精進大勇猛は、何處より得來つたものであるか。問はずと知れた事であらう。これから考へて見れば船中で、颶風を知らずにしまつたのも、一概に大

寐坊とも云はれまい。二十三歲の壯年にして、既に此境に到達した禪師なればこそ、明治の聖代に至つて、正宗國師の勅號を追謚せられたのである。

嗚呼、吾人凡夫は幾生修し得て、此境涯に到達するであらうか。難。難。

天地萬物、皆無に生じて無に歸す、一切蠢動含靈の物、來つて其自るところを知らず、去つて其住するところを知らず、故に其體本空、我望の學問、切に形器上に向つて布置すべからず、一時の娛好、終に枯落に屬す、然りと雖も空しく斷滅の間にあらず、浮雲にして蒼狗白衣となる、皆空中の變幻、必ず有るところのものなり、吾た〻其空々の體を信じて、變幻の轉ずるところとならず、是を以て天地我にあり、萬法身を生ず

（南泉）

第六章

常軌を逸するなかれ

お三婆……婚姻は一生の大事……鐵箸面を燒く……血脈論……見性を言ふて婬慾を言はず……旃陀羅も亦成佛を得ん……乞食桃水……死者の殘飯を喰ふ……百萬圓の見舞……變物の集合……志公和尚の藥方

功名富貴を土芥視して、白眼看る他の世上の人と濟し込み、樹下石上に閑寂の生涯を送るのみを以て、禪を修した人とするか。否、禪を修するの要は、其活機を利用して、己のため、人のため、將國家のため、社會のため、一切衆生のため、慈悲の佛眼を開き、勇猛精進の心を以て、獅子奮迅の大活動をなすべきも、人生の常軌を逸してはならぬ。徒に結跏趺坐して、花は紅柳は綠と空嘯き、自分ばかりが光明赫灼の佛になつた

つもりでも、人生と沒干渉の一閑人が、何の役に立つものであらう。さればこそお三婆が白隱禪師に參して、隻手の聲を聞けと云はれ、即坐に

白隱が片手の聲を聞かんより
兩手を打つてあきなひをせよ

と口吟したのである。又禪師が、駿州庄司氏の娘お察に諭して『汝已に佛法を見得す、何ぞ世法を嫌はん、速かに好配を得て、父母の意を安んせよ、婚姻は人間一生の大事なり』と人に嫁せしめたところなどは、流石は禪師である。之に反して良然禪尼が『三子を生まば必ず暇を賜へ』と良人に約束して、二十五歳の時に至つて、約束の如く三人の子が出來たので、良人のために妾を迎へ、出家したのは何のためであらう。それも宜いが綠の黑髮を剃りこぼち、青道心となつて、弘福寺の鐵牛和尚を訪ひ、鐵牛に『お前のやうな眉目の美しい若い尼は、法魔である』と拒絕されて木庵の徒弟白鷗を訪ひ、こゝでも前の如く刎付られて、傍の民舍に入り、鐵

筈を燒いて、顏面を爛らし、漸く白鷗の許可を得たのは、殆んど狂人の所爲である。如何に求法の心が切であると云つて、中正の道を失つた行ひをしては、却つて禪の本旨に契はない。道に入り法を求むるに、必ずしも出家しなければならぬと云ふ事はない。釋迦は王位妻子を棄てゝ出家し、慧可は臂を斬つて、達磨に呈したと云つて、後世の人が無暗に其眞似をされては、此人間社會の不幸は測るべからざるものである。達磨の所說として傳へらるゝ血脈論の中にも、左の文句があるが、之を讀めば、在俗の人でも、見性成佛の法を得らるゝ道理が分る。

若し自心是れ佛なりと見れば、鬚髮を剃除するにあらず、白衣も亦是佛なり、若し見性せずんば、鬚髮を剃除するも亦是外道なり、これによつても頭顏を圓めるばかりが、佛法の修業ではない。見性の道さへ得れば、白衣即ち俗人も立派に佛となれるではないか。然るに何を苦んで、折角生んだ子を棄て置き、花の顏を燒き爛して、身を寺院に投

ずるのであらう。其次には

問ふて曰く、白衣は妻子あり、婬慾除かず、何によりてか成佛を得ん。

答へて曰く、只見性を言ふて婬慾を言はず、たゞ見性することを得ば、婬慾は本來空寂なり、斷除を假らず、亦樂著せず。

何を以ての故に。

性もと清淨なるが故に。

五蘊色身の中に處在すといへども、其性本來清淨にして、染汚することを得ず。法身は本來受なく、飢なく、渴なく、寒なく、熱なく、病なく、因愛なく、眷屬なく、苦樂なく、好惡なく、長短なく、强弱なく、本來一物の得べきことあるなし。只此色身の因あるを執するによりて、即ち飢渴寒熱瘡病等の相あり。若し執せずんば、即ち作爲するに一任して、生死の中に於て、大自在を得ん。一切の法を轉じて、聖人と與に、神通自在無礙にして、處として安からずと云ふことなし。

若し心に疑あらば、決定して、一切の境界を透過す。最好の作を作し了せずんば、生死に輪回することを免れず。若し見性せば、旃陀羅も亦成論を得ん。

旃陀羅とは何であらう、牛豚を屠殺するを業とする者である。殺生は佛敎に於て五戒の一に列し、最大罪惡としてあるが、之を職業として居るものは罪惡でない。見性次第で、亦成佛することが出來るのである。次の文句で其意はます〳〵明瞭に分る。

問ふて曰く、旃陀羅は、殺生作業す、如何にして成佛を得ん。

答へて曰く、只見性を言ふて、作業を言はず、縱ひ作業するも同じからず、一切の業は他を拘することを得ず云々。

とこれらの道理が、一通り了解した後でなければ、迂濶に禪の修業などを始むべきものでない。從來我邦の禪僧禪徒と云ふ者は、常軌を逸して、漫りに奇言奇行を衒ひ、己れ獨り見性成佛したつもりでも、他から見れば瘋癲漢と見える者が多い。乞食桃水なども其一例である。

乞食桃水と云ふは元肥前島原禪林寺の住職で、後に跡を晦まし、行方知れずになつた。二人の從弟が雲水となつて、三年間諸國を歷巡り、京都に於て、漸く乞食の群に打混じて居る桃水を尋ね出し、連れて歸らうと思つて、種々に勸めたが承知しない。據ろなく桃水の側に侍し、同じく乞食となつて居る內、仲間の乞食が病死したので、桃水は二人の徒弟に命じ、路傍に埋葬させ、死者の喰ひ餘した食物を取り、自分で半を喫し殘餘を徒弟に喰べろと云つて差出した。徒弟は師の命であるから、其不潔を忍び、面桶を鼻の下まで運んだが、其臭穢に堪へず、嘔吐を催して一口も喰ふことが出來ず、到底此境涯には居られぬと、桃水に別れて、歸國の途に就いた。其時桃水の所懷に、

如是生涯如是寬。弊衣破椀也閑々。飢餐渴飲只吾諳。世上是非都不干。

と斯る生涯を送らなければならぬ理由があれば格別、さもなければ、狂僧と云ふより外はない。

僧侶として名譽を好み、權力を慕ひ、法衣の緋紫を論じ、座次の上下を爭ふやうでは、如何なる大伽藍に住し、數多の侍者に介抱せらるゝも、桃水の唾棄するところであらうが、さりとて餘り奇矯に失したるも宜しくない。禪僧と云へば、何となく尋常に外れた言語擧動があるとか、貴顯搢紳の前で禮儀を無視するやうな事をしなければ、物足りぬと思つて居るは、隨分困つたものである。禪の歸趣は元より大中至正なる宇宙の眞理と合一すべきもので、奇矯を衒ひ狂簡を貴ぶことは飽まで排斥しなければならぬ。居者遊女の如き賤むべき厭ふべき業に從ふ者でも、一たび見性すれば直ちに成佛すると共に、公侯將相の輩も、別に忌み憚るところはない。然るに世人は禪僧が某公某侯の門に出入したと云へば、直ちに猜疑の眼を側て之を是非するより、名を衒ひ徳を誇るもの、却つて

汲々常識の言行を揖まゝにするのである。而も人生に於て一毫も裨益するところなく、社會より度外視せらるゝに至る。在家の人にして、禪を修する者も、其弊を承けて、人並に外れた事さへすれば、禪機があるとか何とか、稱讃を博する傾向のあるのは歎息すべきことである。鳥尾得庵居士が、臨終の際、大阪の藤田傳三郎に『百萬圓を携へて見舞に來れ』と打電したなどは、小供騙しのお笑ひ草になるか知らねど、無意味の惡洒落、眞の野狐禪と云ふべしだ。されば世人も禪僧禪徒と云へば、何か變物の集合とばかり思つて居る。これらは何れも禪魔に魅せられ、禪病に罹りて、濟度すべからざる外道である。

梁の武帝が志公和尚に『如何か修行して、永劫人身を失はざることを得ん』と尋ねた時、志公答へて曰く『貧道に一の樂方あり、五羅山中に往て採取せり、

不瞋心、二具　　常歡喜、二兩

慈悲行、三寸　　忍辱根、四概
智慧性、五升　　精進意、六合
除煩惱、七顆　　善智識、八分

右件の藥をば、聰明の刀を用ゐて、平等の砧上に向ひ、細剉して、人我の根を去却し、無礙の臼中に入れ、金剛杵を以て、搗くこと一千下、波羅密を用ゐて、丸となし、毎日八德水を取つて、一丸を服すれば、即ち永劫に、人身を失せざることを得ん。

此藥を服するに口を忌む、

少語は第一の寶なり、
忍辱は無價の珍なり、
他人の過を說くことなかれ、
終に歸して自ら身を損ず、
他を罵るは還つて自ら罵るなり、

他を瞋るは還つて自ら瞋るなり、
譬へば木中の火の如し、
鑽り出して自ら身を燒く』

と頗る効驗のありさうな藥方であるが、我邦に古來流行せる禪病にも何か良藥が慾しいものである。

志公は即ち寶志和尙と云つて、梁の武帝に尊崇せられ、妙覺大師と云ふ勅諡を受けた。武帝は此良藥方を敎へられたが、等閑にして服用しないと見え、達磨の大獅子吼にも、昏々として沈睡し、遂に國政を亂し、叛臣に攻められ、臺城に饑死したのである。如何なる良藥も服用しなければ、効驗なく、又多く飮み過ぎても、中毒する憂ひがあるから、餘程注意すべきものであらう。

第七章

禪機の大活用

祖元無學禪師……大元三尺の劍……蒙古來襲……莫煩惱……獅子兒……吾怖關東令如山……臣平時宗方寸中……大功臣……大悲父……大孝子……禪の大活機

人生の常軌を逸せずして、見性成佛の道を尋ね、能く掀天動地の大活機を示した人物を擧ぐれば、弘安の役に、十四萬の胡兵を、西海に掃蕩したる北條時宗である。蒙古の一部落から起つて、四百餘州を席卷したる忽必烈も、此一打撃に遇つて、再び我金甌無缺の國を窺窬することが出來なくなつた。元より祖宗の威靈と、我々祖先の忠勇にも由るが、當時兵馬の大權を掌握したる時宗が、圓覺寺の開山、祖元無學禪師の指教を受けたことが、大に與つて功がある。

祖元禪師は宋朝の蒙古に亡ぼさるゝ時、兵亂に遭遇して、流離顚沛の後捕へられて斬に處せらるゝに臨み、優容迫らず、泰然自若として、

乾坤無地卓孤節。喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裡斬春風。

と一首の偈を高吟したので、豺狼に等しき蒙古の兵も、其大丈夫の精神に感じて、遂に放還した。それより日本へ來朝して。北條時宗の禮聘するところとなり、圓覺寺開山に請せられたのである。されば蒙古は祖元に於て國讐であるから、時宗に敎へて、之を掃蕩せしめた一事は、實に快心の至であつたらう。身を桑門に托して、人事を冷眼に付したと云つても、宋朝に生れて宋の粟を食んで居れば、宋の社稷を亡ぼした蒙古に對して、義憤の心がなければならぬ。佛眼を以て見れば、宋も元も一物一體、恩讐の差別はないが、それは單に理想に止まつて、斯ふいう場合には、たゞ一圖に佛の平等觀に拘泥する筈がない。若し平等觀に安んず

るものとすれば、禪の流行は國家のため大に悲しむべき事となるであらう。

蒙古來襲の年。即ち弘安四年の正月、時宗來つて祖元に謁し、祖元は莫煩惱の三字を書て與へた。時宗見て『これ何のためぞ』と問ふに『春夏の際博多に事あらん』と警めた。時宗其意を領して退けば、果して蒙古が來襲し、十四萬の胡兵。西海を蔽ふて一擧に我神州を蹂躙しやうとした、警報一たび鎌倉に達するや、時宗甲冑を着け、寺門に至つて、祖元に謁し『大事到來々々々々』と叫んだ。祖元、時宗の顔を一睨して『如何か向前せん』と問へば、時宗一躍して、獅子奮迅の勢を示すと共に、大喝一聲雷の如くであつた『おゝ眞に獅子兒なり、能く獅子吼す、蕊直前進して、回顧するとなかれ』と祖元の一言は、時宗の膽氣をして、十倍の堅きを加へしめたであらう。祖元更に傍に侍立する長崎次郎左衞門を顧み『汝も亦直に吹毛の劍を揮つて向前せよ』と、主從拜謝して寺門を出で、祖元の云ふが如く、

驀地前進して、遂に蒙古の大軍を擊破し、十四萬の胡兵、生きて還る者幾かに三人、我邦をして泰山の安きに置かしめた。人は颶風に托して、我邦の僥倖とするものもあるが、時宗の心膽は鐵の如く、颶風の有無に關せず、胡兵の掃蕩は期して待つべきものであつた。却つて颶風が時宗の功を大半奪つたので、大に惜むべき事である。尤も元享釋書其他僧侶の手に成つたものは。兎角我田引水の說を立て。空中に樓閣を築く、誇大の記事も多いから、一々正確の事實として信用するに足りないが、時宗が祖元に對し、弟子の禮を執り、平生其提撕によつて、金鑛の如き心膽を鍊り上げ、死生關頭に透脫して居たことは、歷史の上から確かに證明せらるゝであらう。されば大事に當りて回顧せず、莫煩惱の三字を以て直前邁往の惡辣手段を揮ふことは、平生丈室に端坐靜慮する時に於て養成せられたものである。さればこそ蒙古が震旦を併呑し、新たに帝業を創めたる破竹の勢に乘じて、我邦に臨み、單に威嚇を以て我を臣妾に

せんとしたるも、莫煩惱の時宗は泰山の如く、少しも動かない。當時に於ける我邦人の支那を視るは、今日泰西列國の富強を一つに集めたよりも、恐ろしいものと思つて居たらう。我の力を以て彼の怒を招くは、一卵を磐石に擲つより危險の事として居たらう。最初に其使を遣はされ、驕慢無禮の一書を受けた時に、上下震駭して、手足を措くところを知らず、疾雷耳を掩ふに暇なしと云ふ有樣であつた。其間にあつて時宗は少しも畏怖の色なく、前後三度蒙古の使者を逐ひ、且つ斬つて、飽くまで強硬の態度を取り、遂に彼を激怒せしめて斷行したことではないか。否、勝敗は豫め期すべからざるものである。ただ莫煩惱々々々。此大勇猛大精進の心を以て、彼に對したものと斷案を下して宜からう。頼山陽は日本樂府を作り、歌つて曰く。

筑海颶風連天黑。蔽海而來者何賊。蒙古來。來自北。東西次第期吞食。嚇得趙家老窮蹙。持此來擬男兒國。相模太郎膽如斗。防海將士

人各力』蒙古來。吾不怖。吾怖關東令如山。直前斫賊不許顧』。倒吾檣。登虜艦。擒虜將。吾軍喊』。可恨東風一驅附大濤。不使寸甲日本刀。

關東の令とは何ぞや、時宗の胸中に刻み付けてある莫煩惱の三字から發するものである。大槻磐溪の弘安記を讀むと云ふ詩にも左の一篇がある。

歷海來。來何船。舳艫相銜旗蔽天。咄哉蒙古忽必烈。欺我神國垂饞涎』。陪臣某敢敵王師。遣偏裨將驅鼠鼉。嘗誅使者定民心。一掃萬船在度內』。快颸邀戰五龍山。倒檣競入虜艦間。亂刀觸處髯奴殘。只許三人僅生還』。吁嗟乎轉讀大般若。奉幣諸廟祉。赫々神靈事助怯懦者。何物精誠起神風。臣平時宗方寸中。

當時人心洶々の間に立つて、勇斷果決、鐵案を斫つて少しも遲疑せざるは、實に時宗の方寸であつた。北條氏陪臣を以て國命を執り、九代の間海內の小康を得たが、奸謀の形迹顯著なるがため、古今歷史家の非難す

る所である、然るに罪は時宗の一果斷によつて、殆んど相償はれて居る。實に國家の大功臣として賞讃すべきのみならず、祖孫の罪惡を蔽ふて、家門の光榮を放つた大孝子、大慈父である。而も時宗の父時賴は曹洞の高祖戒承陽大師より菩薩戒を受け、又道隆蘭溪を招きて、爲めに建長寺を創立し、更に聖一國師圓爾に參し、殊に深く兀庵普寧禪師に歸依して、其印可を得たものであるから、其子の時宗が、國家の大事に臨んで、確然不動の精神を以て、禪の大活機を示したるも、偶然ではなからう。自己一身の煩惱を斷除するばかりが、禪の本旨ではない、其身の位置によつて、斯る大處にも活用することが出來るのである、

夫れ坐禪は、大解脫の法門なり、諸法もこれより流出し、萬行もこれより通達し、神通智慧の德、此内より起り、人天性命の道、此内より開く、諸佛已に此門より出入し、菩薩の行即ち此門に入る。

道隆禪師

第八章

禪宗の大發展

源平二氏の爭亂……貴族的佛教の腐敗……鎌禮門院の御悲歎……新宗教の要求……法然……親鸞……榮西禪師……道元禪師……道元と祖元の比較論……宗教界の三分鼎立……腐つても鯛……北條氏の宗教政策

蒙古來の時に當つて、時宗の獅子吼により、禪の大活機を示し、禪の眞面目を現はしたが、其發達の歷史を探れば、亦我邦に於ける禪の本領が分るであらう。

我邦で禪宗の開祖と云へば、誰も知る彼の榮西禪師である。尤も其以前傳敎大師なども、唐へ渡つて、天台を學んで歸る時、禪も併せ修めた事もあるが、これは北宗の漸修禪で、而も弘く世に行はれずに、約四百年

を經過した後、榮西禪師が、宋に航して南宗頓悟の禪法を傳へたのである。榮西は千光國師の勅諡を受けて、臨濟建仁寺派の高祖となつた。

此時は源平二氏の爭亂を經て、源頼朝が霸府を鎌倉に開き、王室の大權が武門の手に歸した時で、佛敎の勢力は如何なる狀態かと云へば、南都北嶺の貴族的佛敎が漸く衰へて、僧侶は其本分を忘れ、甲冑を着し、兇器を携へ、徒らに王室を蔑視し、士民を凌虐し、寺院は江湖浮浪の無頼漢のために、逋逃の淵藪となつて居た。

一方には公卿の優柔不斷、武士の跳梁跋扈で、連歳の戰亂に、國民は一日も其生を聊んずることが出來ない。

國家の爭亂が打續いて、士民が流離顚沛する時には自然無常を觀じて、宗敎的思想が長じて來るものである。又今日は源氏、明日は平家と、其旗色を窺つて、向背を決する公卿、武士の間には、德義節操などゝ云ふ觀念が薄くなつて、一般の國民までも、道德の頽廢が甚しい。然し僧侶

社會の腐敗墮落はます〳〵甚しく、到底朝野人士の心に滿足するやうな敎義を宣傳することは出來ない。

此時の光景は、文學上に現はれて、後の世までも哀れをとゞめて居る。其一二を擧ぐれば、平家物語に、『祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を示す、驕れるもの久しからず、只春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ』とある一段など、何人の口にも暗誦せられ、無常の理を示す常套語となつて居る。殊に哀れと思はるゝのは、源平盛衰記の、後白河法皇が平家沒落後寂光院に幸して、建禮門院と御對話の一段である『今更申すに及ばざることなれども、僧老同穴の昵びをなして、千秋万歲と祝ひし、龍顏(高倉帝)に別れ奉りて、幾程もなく父相國(淸盛)におくれ候ひにき。都の外に漂ひて後は、又八條の尼公(二位尼)にも別れ、天津御子(安德帝)にもおくれ奉りぬ。親しき人々を始として、有りと有りし者共、唯一時に亡びにき。親を思

ひ子を悲む心は、獸すら猶深しと申す、況して人界の額には、何事かこれに過ぎん。釋尊入滅の時は、身子の羅漢五百の弟子の悲みの音、天に上り、地を響かす、迦葉尊者の叫びける音は、三千世界に聞えたり、生者必滅の道、愛別離苦の理なれども、此身のありさまは、昔も今も例少うこそ候ひぬれ。如何ばかりかは、惜みも悲みも候ひし。去れども不殺命限りあれば、一人殘り留りて、彼後生菩提弔ひ候へば、賢くぞ殘り留りにける。貧女が一燈とかやも、かくこそと覺へ候云々』と長くも一旦萬民より國母と仰がれ給ひし御身が、歐類の恩愛を羨み、貧女の一燈と咄ち給ふ御心のはど、千歲の下猶推量られて、涙のはふり落つるを覺えぬ程である。況してや其他の公卿殿上人、戰場に屍を曝す武士の面々、家を燒かれて骨肉離散し、山野に餓を訴へる庶民に至つては、有爲轉變のならひとは云ひながら、悲歎の狀は如何ばかりであつたらう。されば三界の火宅を出でゝ、何處にか安心立命の地位を得やうとする心は、最も

切實に感ずるところで、宗教の要求は、口腹の飢渇よりも急務であつたが、徒らに現世の利益を求むる加持祈禱の貴族的佛教は、腐敗に腐敗を重ねて、少しも便りにならない。こゝに於てどうしても國民の飢渇を醫すべき新宗教が起らなければならぬ。果然新宗教は起つた。法然上人の淨土念佛、他力易行の法幢を翻へして時勢と人心との歸向を得たので、南都北嶺の墮落僧共は、俄かに狼狽して之を妨げた。之がため上人は一たび流竄の身となつたが、ます〳〵衆生の歸依を得、其門下より更に親鸞上人が出て、肉食妻帶、俗に在つて俗を化すといふ眞宗を開いた。實に我宗教界に於ける破天荒の大革命で、徒らに皇室の餘威を借り、暴虐を恣まゝにした舊佛教に對し、平民主義の法を弘め、煩瑣の儀式を撤して、たゞ一向專念に彌陀の佛名を稱すれば淨土往生を遂ぐると云ふ簡易明快の教であるから、天下の緇素は翕然として之に歸向した。平安朝の舊佛教が、如何に之を撲滅しやうとして

も、衆庶の心を得たる新勢力には抵抗することが出來ない。彌陀の大願船は順風に帆を揚げて、四海の中を縱橫に乘廻すやうになつた。宗教上に於ける此大革命が、王室の式微によつて、兵馬の大權、下に移ると、其時代を同じうしたことは、大に着眼すべき點である。

されども他力易行の念佛稱名を專らとする新宗教は衆多の凡愚を化導するには、最も適當であるが、中流以上の士人に對しては、其信仰を得ることが困難である。親鸞は夙に之を憂ひて、聖道、淨土の二門を折衷し、其缺點を補はうとしたが、十分滿足のものが出來ない。

此時に於て榮西禪師が宋より、臨濟の正脈を承けて歸朝したのは、適當の宗教に渴したる我邦中流以上の士人に取つて、太早の後に甘雨を得たやうなものである。殊に其直截簡明なる頓悟の禪旨は、鎌倉武士の氣質に投合し、建久三年閏二月、尼將軍政子の歸依を得て、鎌倉龜谷に壽福寺を創立し、更に進んで京都に建仁寺を創立し、法海の龍象として、禪風

を宣揚した。

抑々臨濟の法脈は菩提達磨より二祖慧可、三祖僧璨、四祖道信、五祖弘忍、六祖慧能に傳へ、更に南岳懷讓、馬祖道一、百丈懷海、黃檗希運の四人を經て、臨濟義玄に至つたものである。臨濟から興化存獎、南院慧顒、風穴延沼、首山省念、汾陽善昭、石霜楚圓、黃龍慧南猶八傳して萬峰山の虛庵、これが榮西に祖衣を付し、正脈を傳へたものである。されば榮西禪師は達磨より二十六代。釋迦世尊より算すれば五十三代の法孫に當つて居る譯で、三國傳來の正法眼藏、涅槃妙心の來歷を、始めて耳にした、我邦の僧俗は、如何に驚いた事であつたらう。

且又慧可が臂を斷つて法を求めたり、六祖慧能が、無學の一賤奴でありながら、上座神秀の所解に對し『本來無一物』と喝破して、南頓北漸の別を生じたり、臨濟が黃檗に向つて『如何なるか是れ佛法的々の大意』と問ふて六十棒を喫し、棒々血を見て、大悟した事などは、如何にも壯烈痛快で

わつて、小耳に挟んだばかりでも、骨鳴り肉躍るやうな事蹟だから、我邦武士の間に歓迎されたのは無理もない。

然し榮西禪師は、北條時政の薨じた年に、七十五歳を以て遷化したので、鎌倉幕府も源家三代、骨肉相食み、内訌紛々たる時であるから、何程武士の氣質に投合したものでも、意を安んじて之を修する暇がない。それがため禪師はたゞ種子を植付けたばかりで、枝葉繁茂、紅紫爛熳たる美観を見ずにしまつた。承久の亂を經て、泰時の仁政により、海内悉く北條氏に服してから、禪師苦心の結果は益々現はれて、禪風は士林を風靡した。恰も好し此時道元禪師(承陽大師)といふ一豪傑が出て、榮西禪師の高風を慕ひ、二十四歳の壯齢を以て支那に航し、法を求め、七年を經て歸朝した。

其血胤を問へば、父は久我内大臣通親、母は攝政基房の女である。容貌人に優れて清秀都雅、加ふるに重瞳の奇相、二十三歳の時榮西禪師の法

嗣明全禪師より、佛祖正傳の菩薩大戒を受け、支那に渡つて諸道場を歷巡し、天童山の如淨禪師より印可を受けて歸朝した道元禪師の事である から、京都に於ても鎌倉に於ても、法譽隆々として緇林を動かした。然し禪師は從來の佛教が、政治上の權勢に阿諛して、徒らに堂塔伽藍を飾り衆目を眩惑して、佛陀の本心に違ふのを慨歎して居られた。弘法と云ひ傳教と云ひ、側面から觀察すれば、一種の大山師である が、道元禪師は、自分が貴族の出身にも拘らず、之を嫌つて、歸朝後も深草に閑居し。次で越前の山中に至つて一寺を創立した、それが曹洞宗の大本山なる永平寺である。

斯くて道元禪師の法譽は天下に傳播し、鎌倉の北條時頼も之を傾慕して頻りに招請したが、容易に應じない、再三の懇請によつて、遂に一たび錫を鎌倉に移し、時頼に菩薩戒を授け、道崇の法號を與へた。時頼は如何にもして、之を長く鎌倉に留むるつもりで、一大寺を建て、開山に祭

り込まうとしたが、禪師の志は鐵石の如く、固く拒絶して、飄然永平寺に歸つてしまつた。此事に就ては種々憶測の説もあるが、要するに政治上の權勢に依頼して、七寶莊嚴の伽藍を建立し、佛法を興隆しやうと云ふは、宗教家たるものゝ本分でないとの大抱負を示したのである。我邦の高僧智識と云はるゝ者も澤山あるが、能く宗教家の本分を守つて、權勢の左右するところとならないで、心事の最も高潔なるは此道元禪師である。其後時頼が越前に於て三千石の地を永平寺に寄附する券狀を作り、禪師の高弟玄明に持たせ遣はしたところが、禪師は大に怒つて、玄明の法衣を剝ぎ取り放逐し、玄明が坐禪した床下の土を七尺掘り穿ち、取棄てたと云ふ話もあるが、これは少しく奇矯に渉つた行爲で、禪師の高潔を衒はんがために、後人の潤飾したものと思はれる。然し券狀を還したことは事實であらう。後嵯峨天皇も紫衣を禪師に賜ふため勅使を三度遣はしたが、三度ながら辭して受けず、最後に漸く之を拜受して、

永平雖谷淺。勅命重々。却被笑猿鶴。紫衣一老翁。

の一偈を作り、生涯一たびも之を身に着けなかつた。これらの行爲は、支那的隱者の風に感染したやうなところもあるが、宗教を以て俗權の外に置くと云ふ模範を後世に留めたものである。曹洞の一派が臨濟と兩壘相對して、今日に至るまで宗教界の偉觀を呈して居るのは、全く其の高潔なる心事の餘澤である。

之を祖元禪師が『莫煩惱』の三字を絶叫して、時宗を鼓舞策勵した所業に比すれば、一は寒流石上一株の松、亭々として雲霄に沖するが如く、一は盤陀たる大石、千仞の峯頭より落下して、林壑に震盪するに似て居る。一は松風颯々たる、巓上を照す一輪の明月で、一は雨師風伯を叱咤して、天柱を撼かす一聲の霹靂である。夜開童子呼不起は道元の高臥に譬ふべく、猛虎一聲山月高は祖元の豪氣に比すべきものであらう。然し道元を以て閑寂に甘んずる枯木禪とし、祖元を以て哄喝を事とする野狐禪とす

るは當らない。道元は始終に亘つて其體を示し、祖元は一時に處して、其用を示したものである。彼を正とすれば此は權で、彼は長く清範を留め、此は暫く活機を現はしたので、兩者其地を替へれば、矢張り同一の作用に出づるであらう。凡ての事が、體ばかりで用がなければ死物になり、體がなければ、用のある筈がない。正を守つて權を知らなければ、木偶と同じく、權を專らにして正を失へば狂漢と擇ぶところがない、禪の體は元より靜慮にあるが、時に隨つて活機がなければ、何の役にも立ぬ、こゝが當意卽妙とも、臨機應變とも云ふところである。

我邦武士の氣質に投合したる禪は、此の如くにして傳來した。是に於て我邦の宗教界は三分鼎足の勢となり。

(舊)天台、眞言……公卿(京都)

(新)淨土、眞宗……平民

(新)臨濟、曹洞……武家(鎌倉)

眞言は天台に比すれば平民的分子多く、淨土、眞宗に次で日蓮宗起り、公卿の間にも禪を修するもあり。武家にも念佛に歸依するものもあつて、互に相出入し、截然たる區劃を立つることは出來ないが、大體に於て、斯ういふ傾向を生じた。されば天台を指して京佛敎と云ひ、禪を指して鎌倉佛敎と云ふも差支べなく、其間に政治上の分子を含んで、互に祕密の魂膽を運らしたものである。然し鎌倉は兵馬の大權を握つて、威力天下を壓し、京都は式微の末運に際し、佛敎新興の兩者も之と相比例して、彼は落日孤城、纔かに殘喘を保つのみ、此は春卉の榮に向ひ、百花爛熳の觀がある。

されども鎌倉は開府以來歲月淺く、金碧煇煌たる伽藍は幾個でも建築する實力がありながら、それに相伴ふて天下に誇耀すべき碩擧鴻德の僧侶が乏しい。之に反して京都は衰微したと云つても、奈良、平安の兩時代數百年來の遺物として經律の蘊奧を極めた學僧が多い。天下緇素の輿望

は、腐つても鯛として京都を崇び、鎌倉を輕んずる風があるので、北條氏は大に之を憂ひた。そこで京都より碩學の聞えある者を鎌倉に拉し去らんとしたが、元より數百年來王室と離るべからざる關係があるので、北條氏の意の如くなるものはない。時頼が道元禪師の招請に、骨を折つたのも、單に深く歸依したばかりではない。大臣家の出身と云ふので、一種の祕密があつたものだらう。それも首尾好く成功しないために、方略を代へて、朱から數多の禪僧を聘して、京都に對抗せしめたのであるが、其頃僧侶の支那に對する思想としては、宛かも現今の科學者が、泰西諸國を視るやうなもので、遂に鎌倉のため壓倒せられ、北條氏の方略は巧く圖に當つた。鎌倉佛敎の禪宗は、斯ういふ歷史上の關係より、ます〳〵旺盛を極めて、天下を風靡するに至つたのである。

第九章

京都の禪風

祈禱佛敎の衰微……仙洞御所の物の怪……妖は德に勝たず……普門禪師の法力……龜山上皇の歸依……公卿の勝手働き……笏で飯の水加減……上皇普門禪師の像に贊す……紈袴子弟の面目一新建武中興の光……權力富力は禪の大禁物……劍と禪との比較

北條氏は最初政略上、支那より陸續禪僧を聘したものであるが、遂には信心を捧げて、これを崇敬するやうになつた。殊に時頼、時宗に至つては、禪の堂奧に入つて、一心の運用其の妙を極め、政治上にも大に効を現はしたのである。

當時支那より來朝した禪僧の中で有名の人々を擧ぐれば、大覺禪師(道隆蘭溪)佛光禪師(祖元無學)普寧禪師(兀庵)聖一國師(辨圓圓爾)大明國師(普門無

關)一山國師(一寧)大鑑禪師(正證清拙)等一々數へ切れない。

鎌倉佛敎の禪が盛んになつて來たので、京都の祈禱佛敎は種々氣を揉んだが、どうしても之に打勝つ力がない。果は追々京都にまで禪の勢力が擴張せられて、堂上方にも大に持囃さるゝやうになつた。其原因の一つを擧げやう。

此時龜山上皇は位を後宇多天皇に讓り、洛東に離宮を建て、土木の宏麗を極め、仙洞御所として居られた。ところが正應三年の冬。一人の官女が、物に魅せられて、起つたことが出來ないで『何か怪物が上から抑へ付けて居る』と云ひ出した。上皇始め公卿妃嬪が、驚き怖れて、之を見たが別に何物も居ないが、官女は頻りに呻吟して、苦悶を訴へ、幾日經つても起ることが出來ないので、上皇は公卿を集め、種々御諮問があつた。其頃の公卿は迷信家が多いから『これは物の怪の祟りで、高德の法師を招いて、祈禱をするよりは外に法はない』との事で、南都の睿尊といふ法師

に院旨が下つて、宮中に壇を築き、惡魔退散の祈禱を始めた。九十晝夜、金鈴の聲と讀經の聲と相和して雷の如く、護摩の烟は滿殿に漲つて、黑雲のやうであつたが、官女の病は依然として、少しも效能がない。果は睿尊も根氣が盡きて、數多の徒弟を引連れ、夜逃のやうに南都へ歸つてしまつた。

其の時普門無關禪師が東福寺に居て、法譽の高いところから、睿尊の代りに之を召して、拜謁を仰せ付け『禪師の法力で、此物の怪を退治することが出來るか』とのお問ひである。禪師は肅然と容儀を正し『外典にすら妖は德に勝たずと申せば、宸襟を惱まし給ふは御無用』と潔い返答であつた。そこで禪師が二十人の徒弟と、宮中で坐禪して居ると、從來加持祈禱ばかりを佛法と心得た公卿妃嬪が、何か祕法を行ふだらうと隙見をしても別に變つたことはない。たゞ二時の粥飯、四時の禪坐で、鈴の音も護摩の烟もない。これで物の怪が止めば不思議だと、お互に蔭口を利いて居

たが、どうしたものか、數ケ月の間寐たまゝの官女が起き上つて、平生の通りになつた。さア禪師の法力が現はれたと云ふので、公卿妃嬪も俄かに禪師を尊敬し、上皇も深く歸依して、從來の加持祈禱を專らにする宗旨の、賴みにならぬをお悟りになつて、禪要をお問になる基を開いたそれから公卿の間にも、大に禪が行はれた。正應四年の十二月普門が入寂して、翌年一周忌に、上皇は普門の遺弟といふ御資格で、宮中に大齋會を設けた。都下の緇素數千を集めての大供養、其準備に就て、時間を短縮せんため、上皇の御發案で、庖厨の任務を二組に分ち、一方は普門の高弟祖圓が隊長となり、數十人の僧侶を指揮し、一方は上皇が隊長で公卿の圖體之に隷屬し、上皇躬親ら玉體を勞して、米を炊ぎ菜を摘み給ひ、互に遲速を爭つたが、公卿方は母の胎內を出てより以來、始めての事で、鍋釜の使用法さへ知らぬ有樣、菜刀で指を傷けて、典藥頭に俄かの勅使が立つやら、笏を以て飯の水加減をするやら、冠の紐に竈の火が

燃え付いて、大事の作り髯まで延焼するやら、滑稽を演ずるばかりで、更に捗取らない。公卿方がいよ〳〵負け色になつたので、上皇は大に狼狽へ『朕と雖も諸公と故禪師の門下であるに、此危急を見棄てるとは如何』と宣はせ給へば、僧侶の面々、公卿を突き退けて、上皇に御手傳ひ申し上げた。此一事を以ても、上皇が如何に普門の德に服して居たかゝ分る。普門も亦海外漂泊の一衲子を以て、萬乘の尊いに歸依せらるゝこと此の如くであれば、尋常の法器でなかつたろう。

斯くて上皇はます〳〵禪要に御心を傾けられ、法體となつて、祖圓等十人の僧侶と、日々午齋を共にし給ひ、三位以上の公卿を以て、給侍に充てられた。月卿雲客の貴きを以て、僧侶のため膳椀を持運ぶを恥として、違言があつたが、上皇は之を諭して『百川海に入つて、復本名なし、朕も僧侶も何の擇ぶところあらん』と宣はせられた。上皇達磨忌の偈に曰よ、

江浪激奔嵩雪寒。栖々南北不安閑。當時若得相親見。不在魏梁庸主

問。

又普門禪師の像贊に曰ふ。

叢林老作人天眼。電卷星追驟也難。三尺竹篦三尺鐵。未曾動着一遍人寒。

と其歸依の深きは、尋常でない。

上の好むところ、下焉より甚しきはなしで、龜山上皇が既に此の如くであるから。京都の公卿士大夫の間に、禪の勢力はます〳〵扶植せられた。

が、上皇も弘安年間蒙古來襲の時は、未だ禪の何物たるを御存じなく、專ら加持祈禱の力を借りて。國難を免れんと、思召されたやうである。

爾來京鎌倉相對峙して、禪風が宣揚せらるゝうちに、鎌倉方は政治上の權力と、物質的の富力が勝つて居るので、禪も一の慰みとなつた。凡て物事は其最初の珍らしいうちこそ、眞劍に心を籠めて研究するが、漸々狃れるにつれて、儀式や講釋ばかりむづかしく、眞實の精神を失つてし

まう。京都の公卿は之に反して、權力富力が思ふに任せず、何時かは鎌倉の覇府を顚覆し、天下の大權を王室に取返さうと、切齒扼腕の折柄、自然活潑々地の禪機と相觸れて、こゝに建武中興の氣運が芽ぐんだのである。鎌倉武士も、常に蒙古來襲の時の意氣組を以て禪を修すれば、其活潑の精神、容易に京都の制するところでない。京都は臥薪嘗膽の志を抱くところへ、禪の修養を得て、遂に掀天動地の大活劇を演じた。されば關東征伐の密謀一たび漏れて、斬に處せらるゝ時、

古來一句。無死無生。
萬里雲盡。長江水清。

の偈を書し。神色自若として居た。中納言藤原資朝が佐渡に殺さるゝ時は、

五蘊假成形。四大今歸空。

將首當白刃。

と云ふ偈を留めた。中納言源具行は、鎌倉に送らるゝ途中近江の國で、

截斷一陣風。

の四句を吟じながら、白刃の下に屍を横へた。何れも其の臨終の有樣を見るに、死を視ること歸するが如く、禪觀より得來つたものであらう。

逍遙生死。四十二年。
山河一華。天地洞然。

從來執袴子弟の習ひとして、怯懦柔弱、兒女の態であつたことは、保元平治以來の歷史物語の類に徹しても分つて居る。惡左府の稱ある藤原頼長すら、流矢に中つて薨ずる時の女々しさ、又右衞門督頼信が、あの大騷動の張本人として、再三の命乞ひ、刑に處せらるゝ時、偈も句もあつたものではない、嬰兒の如く泣き叫んで、蹴鞠の如く轉げ廻り、劊手も及の加へやうなく、數人にて押へ付け、子供の灸を据るやうにして、漸く首を刎ねた始末。これらは格外の臆病者としても、源平二氏の爭亂に、

公卿はたゝ東西に逃惑ひ、泣き喚くのみで、一つとして男らしい擧動の者を見ない。承久の亂には、幾人か鎌倉武士と鬪つた者もあつたが、これとても元弘の諸公卿と匹敵すべきものでない。されば、京都の公卿が、元弘建武の際に至つて、俄かに勇敢の擧動に出で、從來の紈袴子弟と全く面目を異にしたるもの、禪の感化が大に影響して居るといふも不可はあるまい。尤も同じ禪を修しても、權力富力の相異なる點から。彼は驕りて怠り、此は勉めて勵み、彼は形式に流れて、此は精神を求め、彼は消閑の慰みに供して、此は義憤の志を達せんとして居る。されば北條氏の蒙古擊退と、後醍醐天皇の建武中興は、何れも禪の精神的訓練、與つて功ありと云つても、敢て曲論ではあるまい。精神的訓練に於て功がありとすれば、久しきに狃れて、形式に流るゝものは、何の役にも立ぬ道理である。以上の歷史から考へて見ても、禪は權力富力のために、其の活機を失ひ、形式に流るゝもので、之を個人にしても、縉紳富豪の徒が、

無聊の閑日月を消するための風流禪は、何の効もあるものでない。

風流禪は大に忌むべきものである。宋朝の衰亡も、其の原因を尋ねれば風流禪のために、士氣の軟弱を來したのである、詩文巧みにして唐亡び、理學盛にして宋衰ふと云ふことは、古來人の云ふところであるが、宋の理學は陸象山、朱晦庵に至つて大成し、何れも禪理を骨子として、孔孟の衣冠を着けたものである。イヤこれに就ては吾人別に議論もあるが、其の根本の理は、大體に於て儒禪一致である。而も程朱をして此處に至らしめたのは、風流禪が行はれて、士庶人に至るまで、多少文字に遊ぶ者は、禪理に通せざるを以て、恥とするやうな有樣で、一般の好尚より、自然學者の心髓に浸潤し、知らず識らず經書の註釋も之を用うるに至つたのであらう。

凡て業は勤むるに詳はしく、嬉しむに荒むもので、如何に人生に裨益ある學術でも宗教でも、慰みとして弄び、飾りとして誇るばかりで、精神

に拔けたところがあつては、何の効もない、却つて害になるであらう。其功用の多いものほど、其弊害もます〳〵甚しい。譬へば正宗の寶刀を以て、小兒の玩具に供するは菜切庖刀よりも危險で、菜切庖刀は木刀より危險であると同じだ。と云つて其功用の大小を論ずれば、木刀より庖刀、庖刀より寶刀である。

直指人心、見性成佛の禪は、宗教中の寶刀である。無智の小兒が之を玩弄物とするは、何より危險である。之を用ゐても、花鋏の代りにならない。又腰拔の隱居が平生禪の體を守つて、容易に動かないのは寶刀を匣に藏して置くのである、たゞ深く藏匿して、寶の物腐となるのは枯木禪、死灰禪あでる。常に拂拭砥礪して、錆の出ないやうにしなければならぬ。銀箔を木刀に塗つて、寶刀と稱し、人を嚇すのは、野狐禪である。イザ鎌倉と云ふ時、ナマクラの役にも立たない。武庫は開かざるに威あらうと云ふても、治に居て亂を忘れぬ心懸がなければ、折角の寶刀も、喜

蒲刀と一つである。一旦緩急あれば、決然起つて、山に虎豹を斬り、海に鯨鰐を戮するの大作用を示すべきである。

鎌倉武士も蒙古來襲の前後は、其寶刀を磨くに精神を籠めたが、漸々驕りに長じて、實用のものより、外觀を飾つたものを慾がるやうになつた。中身を吟味することを忘れて、鍔や鐺に、金銀を鏤めても、拔けば竹光大根を切るにも骨の折れるやうになつた。これに對して京都は竹杖の中に仕込んだやうでも、中は在銘の業物で、眞劍の勝負には、何時でも間に合ふと云ふ有樣。建武中興の大業を成就したのも偶然ではない。

以上は鎌倉對京都の禪に就て、歷史的批判であるが、個人としても、禪の精神を忘すれて、風流禪に墮しては、却つて弊害を生ずるであらう。

○

夫悟有頓漸。頓乎多誤人。
悟後不加修。爭得如來身。

梁川星巖

第十章

建武中興以後の禪

藤房と關山國師……隱遁禪……邦人の氣質……ちよいと見てちよいと惚れる腐れ緣……和歌を鞭撻に代ふ……尊氏と疎石……平等無差別……黯業の秘訣……勅願寺のお止め……山師坊主……楠公と明極……宿引坊主

京都の公卿禪は、遂に鎌倉を壓倒し、建武中興の盛業を見るに至つたが、忽ち驕怠の心を生じて幾くもなく、再び天下を亂し、尋で兵馬倥偬の間に猶道を禪林に問ふ公卿があつた。其中の一人は、彼の千里の馬を以て、瑞にあらずとし、龍顏を犯して、直諫を奉り、冠冕を視ること泥土の如く、姿を白雲に隱した萬里小路中納言藤房である。藤房の忠誠は、人も知るところで、其の節に死せざるを責むるは酷論である。權田直助翁の

歌にも

君を思ふ心のかぎりつくしてぞ
身をば雲井の外になしけん

と、蹇々匪躬の節を盡して後に、形骸を土木にするは、儒臣の本分で、新田、楠の武士と一例に論ずるは無理である。此藤房は曾て洛西妙心寺の開山國師(慧玄)に參して禪要を問ひ、一旦豁然として大悟し、

此心一了曾不失。　利益人天盡未來。
佛祖深恩難報謝。　何居馬腹與驢胎。

といふ偈を作つて、國師に呈した。國師一誦して『此心何れの處にかある』と問ふた。藤房『虛空に遍塞す』と答へた。國師又『未審、何を以てか人天を利益せん』藤房『行到水窮處、坐看雲起時』國師『佛祖の深恩如何か報謝せん』藤房『頭に天を戴き、脚に地を踏む』國師『馬腹驢胎、何として入らざる』と藤房起つて國師を拜すれば、國師呵々大笑して『汝今日徹せり』といふ事が、世に

傳へられてある。これによつても當時禪公卿の盛んであつた形迹が窺はれる。たゞ干戈相尋で、海内の騒亂止む時がないため、人々無常觀を抱いて、隱遁者が殖えて來ると共に、禪も專ら閑寂を愛する枯木禪に傾いて來た。

亂世に隱遁者の多いのは、古今東西同一轍で、支那でも失意の英雄が、能く禪老に隱れた。唐末から五代及び宋の南渡以後の有樣を見ても分る北條氏が鎌倉に據つて、禪の興隆に力を盡した時は、恰も宋が亡びて、北狄の蒙古が、四百餘州を一統した時であるから、禪林の諸豪傑も、魯連踏海の志を起して、陸續我邦へ歸化したのである(寧一山の如き、元朝の密命を帶びて來たものは別として)祖元の如きは莫煩惱の三字を時宗に授けて、聊か包胥秦廷に哭するの餘憤を漏したが、他は多く樹下石上の隱遁禪といふ臭味がある。加ふるに建武中興も蹉跌して、經世濟民の術に斷念したものが多く、爾來禪の活機がなくなつて來た。殊に我邦人の特

質として、新を喜び舊を厭ふ變化の念が甚だ速かである。所謂興り易く醒め易く、飽つぽい氣質、ちよいと見てちよいと惚れる風があるので、禪も鎌倉武士に迎へられて、鎌倉の一盛り、京都に入れば京都が一盛り、後は忽ち枯枝に鴉のとまりけり秋の暮となつてしまう。此傾向は敢て禪ばかりではない。傳教、弘法が天台、密教を唐より持歸つて、忽ち天下を風靡したのも、此乘じ易い我國民の弱點に投じた爲である。其代り衰へて腐敗することも早い。而も腐敗してからは、初めの氣早に似ず、容易に之を擲つことをしないで、蟲が涌いてもかぢり付て居る。例へば浮氣の男女が、電車の摺違ひで、瞥見したばかりで、偕老の約を結び、夫婦となつて睦しいのは二三日、後は犬も喰はぬ喧嘩をしながら、斷然たる處置にも出でず、腐れ縁となつて生涯を送るやうなものであらうか。初めは處女の如く終りは脫兎の如しといふ事は、兵法の秘訣であるが、我國民の氣質は之を顚倒して、維新以來泰西より輸入した事物でも、大

抵此傾向を持つて居る。豈獨り禪師に限らんやだ。建武中興に與つて力のあつた公卿禪も、隱遁の流行と共に、枯木禪に墮して、氣が拔けてしまつた。此間にあつて、能く禪の活機を應用したのは、足利尊氏である。尊氏が京師の一敗、意氣沮喪して、再び起つ勇氣のない時に。

雲よりも高きところに出でゝ見よ
なにとて月に隔てやはある

といふ一首の和歌を、鞭撻に代へて、將に斃れんとした羸驁を起たゝしめ、蹄齧縱橫天下を蹂躙せしめた者は、彼の有名なる疎石夢窓國師である。尊氏は既に建武帝の逆鱗を犯し、朝敵の名を受けて、必に安んぜざるところがあつた。我邦の國體上臣子の分として、これは當然であらう。然るに疎石の意は『大義名分もさることながら、今は海內の士民塗炭の苦を嘗めて』兵馬倥傯、羽書旁午、一日も生を聊んずる暇がない。禍亂を戡

定して、蒼生の苦を救ふのは焦眉の急で、大義名分に拘泥して爲すなきは、祖宗の靈に對し、却て不忠となる。古人も民を重しとなし、君を輕しと爲すと、勿論一時の權宜を以て、云つた語ではあるが、將軍も此意を體して、堅忍持久、海内平定の功を奏せよ。我亦佛の慈悲眼を開いて、其業を扶ける覺悟である。區々たる毀譽褒貶は、身を包むの雲霧、それより一層透脱して、雲霧の及ばざるところに身を置き給へ、光明赫々たる眞如の眼中、萬物一體、平等無差別』と之を和歌に寄せて、鼓舞したので、尊氏も遂に意を決し、別に北朝の天子を擁立したのであらう。

されど尊氏は猶心に安んじないところがあつて、屢々疎石に參叩し、心要を問ふた。其結果いよ〳〵心に發明して。

『たとへば人、時に乘じ、その勢ひ張良を欺き、樊噲を蔑に思ふとも、常に三寶を敬ひ、吾神明の教へを守らぬものは、たとひ運强くとも、一世二世までは、保ち難し、愚かなりとも、信心あるものは運强し、賢くて勇ありとも、不信心のものは運更になし、悲哉、勇なるものは、己れが機かの勇に迷いて、神明の護あることを知らず。と王法を云はずして、佛法を專一に心懸け、たとひ朝敵と呼ばれても。三寶に歸依する上は、子孫長久の基が立つといふ意を、云ひ現はして居る。能く疎石の教へるところを守つたもので、疎石もまた。我身を忘れて、衆生を利益する心を起せば、大悲内に薰し、佛心と冥合す。

と、たとひ身は朝敵と呼ばれても、萬民の塗炭を救へば、佛の慈悲心に適ふと云ふ意を示めし、更に尊氏のため、霸業を成すの秘訣を教へて云ふ。

慈悲、正直、思案、堪忍、和合を城廓となし、油斷、過奢、諸遊を大敵となす。

と、尊氏のためには帷幕の謀士、否師弟の關係がある。其交情の密なる

有樣は、『夢窓國師御詠』と題する疎石の和歌集に現はれて居る。

征夷將軍尊氏西芳寺の花の下にて法談の後人々歌よみけるとき

心ある人のとひくるけふのみそ
あたら櫻のとがをわするゝ

征夷將軍おなじ春來臨のとき

山かげにさく花までも此春は
世のつどかなる色ぞ見えける

この庭の花見るたびに植えおきし
むかしの人のなさけをぞしる

初雪の日將軍雪をふみわけて來臨したまひしかば

とふ人のなさけの深きはとまでも
つもりもやらぬ庭の白雪

たはむはとしはしは枝につもりつゝ
ふたゝひかふる松の下雪

されば尊氏は、疎石の大功否大恩に報ひるため、天龍寺を建て、疎石を開山とした。土木の壯麗八目を眩じて、其建立の供養には、尊氏の計らいとして光嚴上皇も臨幸あられ勅願寺になるといふので延曆寺の大衆偏執の心を起し、之を妨害する手段を運らした。禪宗には既に南禪寺といふ勅願所があるのに、更に天龍寺が勅願所となつては大變と、三千の衆徒が坊主頭に鉢卷をして、三百七十箇寺へ檄を飛し、鐘樓の鐘を撞くやら、山王の神輿を擔ぎ出すやら、久しく泣寢入になつて居た衆徒が蜂起して、漸く勅願だけはお止めになつたが、上皇は公卿百官を隨へて、御臨幸あらせられた。此の大騷ぎを惹き起したところを見ても、尊氏と疎石との間は、尋常でないと云ふことが分つて居る。

疎石も中々野心家である。衆生のため拔苦與樂の大本願を起して、尊氏

の覇業を助けたばかりではない。彼は更に幕府の力を借りて、禪宗の擴張を圖つたのである。云はゝ雙互契約として、報酬を得るためで、或る意味から云へば、一種の山師坊主、尊氏は其手先に使はれたのである。

禪宗の寺院は琉石の御陰でます〳〵數が殖え、到るところ金碧煇煌、宗教界の異彩を放つたが、彼の心事は、道元禪師などの高潔と日を同じうして語るべからずだ。禪は元より活機を貴ぶものではあるが、琉石の如きは權變に過ぎて、其中道を失つて居る。況して尊氏に教へたところは我國體上大に愼むべきものである。

然し禪の活機が鎌倉を去つて、公卿に移り、公卿を去つて、足利氏に移り、興廢存亡之に附隨して來た形迹を見れば、瞭として火を睹る如しであらう。

世に傳ふるところによれば、楠正成も亦禪の修要を得たと云ふが、これは一に『明極行狀』に出でたものであらう。

明極和尚(楚俊)の行狀に載せてあるところは、次の如くである。

建武三丙子の年、攝河泉三州の太守、楠姓正成、綸命を奉じ、五月十六日。帝城を發し、湊川に到着し、軍旅を當山の麓に屯す、一日禪師に參見し、問ふて曰く、生死交謝の時如何、師曰く、兩頭俱に截斷し、一劍天に倚つて寒し、正成曰く、落處作麼生、師振威一喝す、正成起立して三拜し、通身汗流る、師曰く爾欲せり矣、正成曰く、若し來つて和尚に見えずんば、安んぞ向上の關捩を超出することを得ん、今より世々針芥を失はざらん、師曰く爾の問酬、舊參に下らず、平居却つて幾個の宗匠を見來るや、正成答へて曰く、某甲少きより、誠を禪門に傾け、頗を宗乘に探る云々。

とこれより正成曾て南都に赴く途中、片岡を經て、一禪僧に遇ひ、問答して、禪に歸依した事が、書いてある。殊に正成が

此道を會得して已來、兵を用ふる自在、機に對する無礙なり。

と云ふに至つては、文字潤飾の巧が、却つて其拙を示すやうな氣がする。從來僧侶の手に成つたものは、誇張虚飾に失して、一々信を措くことが出來ぬ。殊に行狀などは、其徒弟法孫が、力を極めて潤飾を加へ、高名なる人物を捉へて、事實を揑造するから、眉に唾して讀むべしである。吾人の聞くところでは、眞言が正成の歸依した宗旨である。確實なる史料の上から立證すれば、正成が禪に參した形迹がない。尤も延寶傳燈錄にも、正成が關山和尙に參叩した事がある。これも明極行狀と同じく附會の說であらう。

楠正成と云へば日本一の大忠臣大軍師であるから、其用兵の術は禪から出たなどゝ、ちよッと山氣のある禪僧が云ひ出して見たいだらう。例へば宿屋の客引男が、扮裝の立派な、茶代を澤山置きさうな旅客に目を着け、無理に引張り込むやうな者だ。亡者でも成るたけ評判の好いお客を過去帳の中へ咬へ込む。高僧の行狀や、寺院の緣起なども大半其類ひで、

宿引坊主の多いのは閉口する。そんなケチな山を張るより、疎石のやうな大山師になつてはどうだらう。此章を書き終る時冥府より正成の傳言があつた、曰く『僕を餘り道具に使つてくれるナ』と。

白隱

愼みを己が心の根とすれば、
　言葉の花は見事咲くなり
人は皆吉野の山の花を見よ
　我は難波のあしといふとも
はらからの中も互の讎となる
　慾は烈しき劔なりけり
死んだ後佛となるとおもふなよ
　死なぬ內こそ眞の妙法
道二つ仁と不仁の追分けや
　左は地獄右は極樂
矢さけびの修羅の昔を忘れつゝ
　畫寢の蠅をいとふ御代かな

第十一章

禪林の一豪傑

文學の生命……松竹梅の三友……國事探偵の嫌疑……白刃頸に臨む……我是關西放逐僧……勅賜號……母子の奇遇……一場の悲劇……遠勅の使……百萬の軍に勝る威嚴……我邦第一の詩人……山僧佛を嫁ふ……副將軍歷を捧ぐ……大きな事なぐれ

疎石の野心が、一たび尊氏を扶け、其報酬として禪は室町幕府の庇護を得、權力富力を以て、他の諸宗を壓倒したが、權力富力の歸するところは必ず驕慢の心が出て、腐敗墮落之に伴ふものである。個人としても此傾向は免れ難いから、其性質上權力富力の外に超然たるべき宗教は、殊に弊害が多い。されば疎石が一時の權變を以て、禪の勢力を扶植した事業は、道のため大功あるが如く見えて、實は道の罪人である。見給へ、禪

が幕府の庇護を得てから、僧尼を度し、堂塔伽藍の巍然雲に聳ゆるものは數を殖したが、たゞ外觀が立派になつたばかりで(達磨曰く無功徳)内部は漸々腐敗墮落に傾き、形式を專らにして精神を疎かにして來た。斯うなつては奈良平安の昔を夢みる舊佛教と、何の擇ぶところがあらうぞ。鎌倉の五山に對して、京都にも五山が出來たが、僧侶の多くは、幕府に阿附して、文字應酬の閑日月を送るより外に用はない。然し千戈相尋ぎ、典籍散逸の時代に於て、文學の生命を維持し來つたのは、禪僧の功に歸せねばならぬ。

此間に於て吾人は、禪林の一豪傑を紹介する義務がある。其人は誰であらう。峨峨集の著者雪村友梅禪師だ(眉に睡して讀め)

禪師は越後白鳥鄕に生れて、夙悟早慧、童子を以て寧一山の門下に列した。一山は松竹梅の三友を以て、三侍童に名け、其一人は禪師である。友松、友竹は世に傳ふるところもなく、たゞ獨り禪師が嶄然たる頭角を

露はし、十八歳にして支那に遊び、國事探偵の嫌疑を以て、露川の獄に繋がれ、湯火の鞫訊に遭ひ、百折不撓の精神、凛然として元人を感動せしめ、萬死に一生を得て、西蜀の僻阪に投竄せられ、前後二十三年を經て日本へ歸り、禪林の龍象として、一時大に振つたものである。

禪師が支那へ渡つた時は、元の成宗鐵木耳の大德十一年、弘安の役から二十七年目で、十四萬人の將卒生きて還る者纔かに三人と云ふ怨みは、元人の肝に銘してまだ忘れない。

成宗の大德三年即ち禪師が支那へ渡る八年前には、寧一山が成宗より、妙慈弘濟大師の號と、金襴の袈裟を賜はり、通好布教に口實を借り、我が國狀を探知し、更に再擧を謀らんとした時である。

先方が斯る擧動に出る位であるから、禪師の渡航を以て、怪しい奴だ、日探だと邪推を廻して、引捉へたのも無理ではない。此時禪師を舍して敎旨を授けた湖州道場山の叔平隆和尙も、禪師に連坐して、獄卒のため

に生命を奪はれた。禪師もいよ〳〵斬に處せらるゝことゝなつて、白刃頸に臨んだ時、祖元禪師の『電光影裡斬春風』の一絶を高吟し、神色自若、生死を透脫した大丈夫の氣象に。刑吏も驚いて、死罪を赦した。これは渡航後七年目、禪師が二十四歳の時である。禪師の大膽豪氣もさることながら。祖元禪師の二十八字が、數十年の後に至つて、禪師の護身符となるとは、亦不可思義の次第である。

それより三年を經て、西蜀即ち今の四川省に竄謫せられ、西、函谷關を出でゝ、秦隴を度り、嵯峩を望み、雲棧石梯の險を踰え、孤猿斷腸の聲を聞いて、道途の艱難備さに嘗め、漸く成都の編管地に着いた、『我是關西放逐僧』と云ふ句を、毎首の上に置いて、十絶句を賦したのも此時で、『觸髏及下に腥血を逃る』と諷詠しつゝ、萬里の異域に、金鐵の心膽を錬り上げた禪師の事であるから、其氣格の高峻、遠く時流に挺出するも怪むに足りない。

こゝで禪師は『一身縲絏餘、三載長安市』と歌ひ『有心即羈鎖、無慮是康衢』と悟り、仰いで峨眉の雪を餐ひ、俯して岷江の水に嗽ぎ、道心堅固、無念無想の境にあつても、萬里の天涯、白髮夢に入つて、父母を想ふの念は甚だ切である。當時元の名僧たる茂古林は詩を贈つて曰ふ。

道人海外來。歷涉幾難阻。不唯凌驚濤。益遭世網苦。脫身萬死中。
剋志在佛祖。有如百錬金。遶指色可覩。』玄機歷落如轉丸。迅手展托
胡爲難。萬人叢中獨穎拔。一鏃解破三重關。』重來兩臉鐵色黑。欲話
三生緣末得。茶甌放下便言歸。爲省慈親走匍匐。』床頭主丈不假擧。
一句臨岐聽吾語。』水宿風餐宜善爲。扶桑夜半金鳥飛。

これを見ても、禪師の堅忍不拔が、如何に彼國人の推重するところとなつたかゞ分る。詩中慈親を省するためと云へば、此時歸東の志は、實に想ひやられる。

其翌年文宗圖帖睦爾が位に即て、禪師の高德を聞き、寶覺眞空禪師の號

を勅賜して、京兆の翠微寺に住せしめた。海外の孤客、刑餘の一比丘が、一朝にして萬乘の至尊に禮遇せらるゝとは、實に異數の特典である。然し禪師は歸朝後此勅賜號を、人に示さないで、滅後七年遺弟が篋笥中から發見したのである。

其翌天曆二年即ち我元德元年の夏漸く歸朝の便船に乘ることを得た。禪師が支那に在る間、元朝は成宗、武宗、仁宗、英宗、泰定帝、明宗、文宗の七主を易へた。十八歲にして往き、四十歲にして歸る。漢の蘇武が匈奴に留まること十九年、出る時少壯、歸るとき鬚髮悉く白しと、仰山らしく歷史に傳へられてあるが、禪師に比すれば、まだ云ふに足らぬ。

禪師の船は先づ博多に着て、更に薩摩沖を過ぎ、相模へ廻つた。北條氏の亡ぶる六年前であるから、鎌倉はまだ日本の中央政府である。

禪師は多年夢寐に見るところの慈親を省するため、一日も早く鄕國越後に向はんとした。馬に乘つて由比濱を過ぐる時、馬は俄かに蹶き、禪師

を振落したので、法衣も袈裟も泥濘に汚れた。

此時路傍の藁席を擡げて雨戸に代へた小舎の中から、一人の老婆が驅け出して、禪師を介抱し、法衣や袈裟を洗ひ淨めてくれた。禪師も其厚情を謝しつゝ、老婆の容貌を熟視すれば、髪は振亂す越のしら雪、憂き世の潮風に吹き寄せられた額の年波、海松のやうなつゞれを纏ひ、やつれ果てた俤は變つて居るが、何處にか忘れぬ母に似て居る。もしやと思つて素性を問へば、確かに其人。こゝで母子の奇遇は、實に一場の悲劇で、吾人の淚は紙上に點々、詳しく形容して書くことが出來ない。

禪師は支那に於て、萬艱を嘗め盡す中にも、得たる阿堵物は饑寒を忍んで、容易に用ゐず、歸朝の後に、菽水の歡を奉ずる用に供し、慈顏の一笑を博せんとした。桑門に入つて佛子となるとも、父は父なり母は母なり、其本を忘れぬ禪師の如きが、眞の佛心を得たものである。俗緣の斷除には口を借りて、父母の奉養を缺く者は、却つて佛陀の罪人である。

それより信濃、豐後の諸寺に歷住して、洛に入り栂尾に閑居し、鎌倉の滅亡、武運の中興、南北兩朝の分裂等滄桑の變を、耳目の外に置いて、專ら禪機を鍊つて居た。

延元二年、赤松圓心の聘禮を受けて、播州菩繩法雲寺の開山となつた。越て五年、朝廷の勅書及び將軍尊氏、直義兄弟の命を以て、京都萬壽寺の住職に、禪師を擧げんとしたが、禪師は固く辭退した。使者の往返三度に及んで更に聽かぬ。朝議違勅の罪に問はんとしたが、禪師の決心は金鐵の如くで、果は法雲寺を出でゝ良峯に隱れた。ア、禪は師朝命幕命を蔑如して、高風を衒ふものではない。當時の禪僧が、俗權に阿附して、漫りに外觀の美に誇る風あるを歎き、宗教家の本分を示して、清規を後世に垂れんとしたものであらう。道元禪師が北條時頼の請ひを却けたと、禪林一對の美談である。

朝廷も幕府も、其志を奪ばうことが出來ないで、荏苒三年の歲月を閱し

猶禪師を起さんため、檀家赤松圓心に内命が下つた。禪師の山を出でないのは、圓心が抑留するためといふ疑もあつて、圓心も板挟みの地位に居り、次第によつては、如何なる罪科に處せらるゝやも知れぬと、恐懼の餘り、禪師の前に匍匐し、懇願時を移して、通身汗下るといふ有樣であつた。禪師も止むを得ず、笑つて頷いたが、圓心は暇を告げて外に出で『我嘗て百萬の軍中に馳突するも、敢て畏るゝところなかりしが、老師の面前に片刻跪對すれば、威嚴人に逼つて、覺えず戰慄す、ア、我何ぞ怯懦なるや』と歎息したといふ事である。

こゝに於て禪師も志を枉げて、京都に入り、萬壽寺及び建仁寺に歷住し、五十七歳を以て遷化した。其著岷峨集は、禪師が支那に在る間の吟詠を集めたもので、其篇什は少ないが、悉く是れ精金美玉で、古今の諸體を備へ、實に藝林の至寶である。

五山僧侶の詩を論ずる者は禪師の岷峨集と、義堂の空華集と、絕海の蕉

堅稿とを以て、三絕として居るが、空華集は篇什多く、沙中の金を拾ふやうなもので讀んで骨の折れる割合に獲物が少ない。蕉堅稿は頼山陽が褒めたほどではない。然し岷峨集の次は蕉堅稿で、義堂は二流も三流も下つて居る。

殊に古詩となつては、禪林に冠たるのみか、我邦に文字あつてより以來、一人として禪師に及ぶものはない。王朝時代は無論の事、德川の世となつて、羅山、丈山、白石、南海、徂徠、南廓、山陽、星巖などでも、禪師に比すれば、古詩の作法を知らぬ無茶苦茶流である。

それは何故と云ふに、以上の人々は古詩の聲律を知らぬ。文章の調子の好いのが、古詩だと誤解して居る。禪師の古詩は聲律がチヤンと格に入つて、日本人の詩とは思はれない。尤も二十三年間支那に居たのだから、自然聲律が正しくなる譯だ。

然し禪師は文字禪に墮した人ではない。日本へ歸つてから作つた詩は幾

首もない。傳に記する所では、『暦書を目にせず、念珠を手にせず、几案に一冊なく、金口の所說、たゞ圓覺了義を以て所詮となす』と云ふ位で、記誦著述の末技に耽らない。岷峨集一部は、實際感に觸れて發する自然の天籟で、雕琢を借らず、自ら高妙なる所以だ。

禪師の人格は、朝廷幕府の權威にも屈しないところで、大概想像されるが、建仁寺を董して、開山を拜せず、人に其故を問はれた『山僧佛を嫌つて做さず』と云つたところなどは、實に禪僧の本領が現はれて居る。

尊氏の弟左馬頭直義は天下の副將軍として、公卿侯伯の懾伏するところであるが、禪師のために履を捧げ、禪師は禮せずして平然之を穿いたので、並み居る公卿侯伯が舌を捲いて、其威嚴に驚いた。これも俗權に屈すべからざる宗教家の本分を示したもので、唐の詩人李太白が、玄宗の寵臣高力士に、靴を脫がせたよりも、美談として傳ふべきものである。

後年驕慢を以て聞へた將軍義滿が、南禪寺の妙葩禪師の靴を捧げたこと

も、直義と禪師との眞似をしたのであらう。

禪師常に徒弟を諭して『吾が法子法孫たるものは奈良の大佛に參詣せよ』と左の偈を示した。

範金十六丈爲身。雄鎭扶桑第一尊。
除是虛空圓滿體。人間雕刻盡兒孫。

別に大佛が有難い譯でもないが、成るべく大きいものに着目して、其結局は無上至極の眞如に到達せよと云ふ敎へで、俚歌に云ふどうせなぐるなら大きな事なぐれと意味は同一である。

禪師の傳記が餘り長引いて、此書の體裁を傷けたやうであるが。現今の禪徒を警醒するには、これも一服の淸凉劑であらう。

○　其角

武帝問はゞ留守と答へよ秋の月

第十二章

文字の捕虜

幕府の奴隷……禪僧は外交係り……藝が身を助くる不仕合せ……

非社會的……陳義溪の虎やア〳〵……藝妓の參禪……支那文字の

弊害……文字のために生命を奪はる……本末の顚倒……武士の活

動

榮西禪師が始めて禪を我邦に弘めてから、活動的の方面は、何時も武事に關係して、第一に蒙古の擊退、第二に建武の中興、第三に足利幕府の創立となつたが、どういふものか創業的に偉大の功を現はす代り、守成的には必ず失敗する。殊に權力富力は一種の黴菌であつて、禪の活機を滅殺し、社會と共に相率ひて腐敗墮落の淵に沈むやうである。

足利時代となつて、禪僧はたゞ幕府の奴隷で、五山の寺格も、將軍の愛

憎によつて、常に其位次を變換されて居た。

雪村友梅禪師なども、最初は飽まで俗權に抵抗を試みたが、遂に時勢の制する所となつた。然し直義に履を捧げさせると云ふ見識を持つて居たが其他の禪僧は全く幕府に使役せられて、文書を掌どるのが唯一の役目であつた。

そこで從來武事的に發展した禪の活動力は、一變して文學、美術の方面へ流注し、我邦の文化に對して大功がある。殊に支那との交通は、禪僧の往來が頻繁なるところから、何事も彼の長を取つて、我の短を補ふと云ふ有樣であつた。

禪僧の往來頻繁につれて、我國民も彼の地理を知り、彼の風俗を知り、海內に志を得ない不平の徒が、支那朝鮮の沿岸を侵掠するもの多く、彼の所謂倭寇の勢力がます〳〵猖獗であつた。

明の歷史三百年間を通じて、此倭寇に惱まされ、屢々使を我邦に使はし

て、其取締方を要求した。これがため明と我邦との外交上、種々の出事があつたが、其文書談判の勞を執るものは、何時も禪僧であつた。されば禪僧は幕府の外交係りと云つても好いくらゐである。

尤も禪僧を外交係りとしたのは、足利氏に始まつたことではない。北條氏が其端を開いたのであるが、最も盛んであつたのは、足利氏に至つて、最も盛んであつた。

これは其時代漢文を能くする者が、外にないためで、例へば德川の末に、西洋諸國と交際を始めた時、閣老を引出して、文書談判の衝に當らせたやうなものである。

其時代の禪僧は、最も海外的智識に富んだもので、今日でいへば、ハイカラ風に染みて居る。ハイカラは何時の時代でも、輕薄に流れ易いもので、禪僧の風儀が、追々亂れて、氣骨のある人物の少くなるも無理でない。ハイカラでなければ、發達しない。そこで詩文は勿論、繪畫に於ては、兆殿司、如拙、周文、雪舟、其他建築、園

藝、雕刻の類まで、禪僧の力によつて、大に發展し、果は茶の湯の如き、風流娯樂の方法を案出するに至つた。

是に於て禪の活動力は全く失せて、閑寂を樂み、風流を弄び、權貴に阿り、富豪に媚び、幇間者流と擇ぶところはない。偶々氣骨あるものも、山林に隱遁し、松風蘿月の間に吟嘯して、生涯を送るに過ぎない。

之を武士にして見れば、先祖が千軍萬馬の中に馳驅して、一國一城の主となるまでには、容易の事ではない。然るに其子孫は先祖の苦心を知らず、驕奢に耽り、酒色に溺れて、果は國を亡ぼし身を失ふものもある。

之を町人にして見れば、千草の股引に、草鞋掛で駈け廻り、澤庵の尻穗で冷飯を掻き込み、精々辛苦の汗を流して、築き上げた身代も、子孫の代になれば、生れながらのお坊ッちやんで、花柳の巷に千金一擲の豪奢を恣まゝにし、果は紙子を着るものもあれば、家事を嫌つて、茶の湯生花三昧に日を暮し、番頭手代のために、大穴を明けられ、賣家と唐樣で

書く阿呆息子もあると同じく、禪も足利氏の庇護を得て、立派の堂塔伽藍が澤山出來るやうになつてから、漸次非社會的に流れ、王朝時代の遺物たる南都北嶺の、貴族佛教、隱居佛教、形骸佛教、拔がら佛教と同一になつてしまつて、少しも活動力がない。然し支那から仕入れた新智識があるだけに、文學、美術、技藝の方面に發展して、所謂藝が身を助ける程の不仕合せ、武士の果であれば、破れ扇を携へて、蔦の上に謠曲を歌ひ、町人の果であれば、幇間箱屋となつて、御世辭笑ひに世を渡るやうなものである。

されば五山の僧侶として、能く宗教家たるの面目を保ち得たものが、幾人あつたか、其得意とする文學さへも、之を廣く國民に傳へることが出來ないで、一宗一派の專有物になつて居たくらゐだから、衆生を敎化することなどは思ひも寄らぬ。ナント甚しい非社會的のものではないか。然し原因を尋ぬれば、まだ一つ、禪が非社會的に流るゝ理窟がある。そ

れは何と云へば、不立文字の敎であり乍ら、反つて文字に拘泥して本來の主義を沒却したからだ。

菩提本非樹、明鏡亦非臺の一偈を作つた六祖慧能は、元來無學の一僧夫である。文字語言の外に頓悟して、五祖弘忍の衣鉢を傳へたものである。然し其偈は既に一首の詩である。支那人は都々逸か甚句位に思つて居るだらうが、之を文字に寫し、日本へ持て來ては、尋常の人間に解らない。況して其他は悉く陳腐漢のとらやア〳〵、禪を修めやうとするには、先づ第一に文字を知ることが最も困難である。恁麼とか作麼生とか、文字で書けば、頗るむつかしいが、支那人の日用語で、かうか、どうぢやナと云ふ類。之を日本人に傳へるには、矢張日本の俗語に改めれば好いに、其まゝ使つて居るから、解るものが解らなくなつてしまつて、何でも物の解らないものは、禪宗坊主の囈語といふ諺まで、出來たくらゐである。ごゝで別に漢字廢止論を擔ぎ出す譯でもないが、支那の文字は之を學ぶ

に非常の骨折である。禪も本來無一物を飽まで根本義として、文字記誦の學問を外にしてしまへば、支那に於ても大に活動力のあるものであつたらう。ところが唐宋の學者文人が、古人の詩句經語などを引用して、問答する習慣となつて、遂に其本色を失ひ、文字禪、風流禪に墮した。本職の禪僧は兎に角、學者文人の禪、即ち王輞川、白香山、蘇東坡、黃山谷などは、全く風流的の意味で禪を愛し、茶の湯、生花などの消閑的娛樂であつた。

蘇東坡が湖州の役人を勤めて居る時、西湖の風景を賞しながら、琴操と云ふ藝妓に對ひ、戲れに『我れ長者とならん、汝參禪せよ』と云つたところが、琴操も中々話せる奴と見えて、早速『湖中の景は如何』とやつた、東坡『落霞孤鶩と齊しく飛び、秋水長天と一色』次に問ふ『景中の人は如何』『裙は六幅瀟湘の水を拖き、髮は巫山一段の雲を挽く』『人中の景は如何』『他の楊學士に隨ひ、鮑參軍を瞥殺す』『此の如くんば究竟如何』『門前冷落して鞍馬

稀なり、老大嫁して商人の婦となる』と東坡の答へは、何れも古人の詩文を應用したものである。想ふに此琴操は多少文學的素養もあつて、東坡は成るべく人口に膾炙して居る分り易いものを以て答へたから、琴操も頓悟して、泥水稼業を止めたが、新橋や柳橋の藝妓を捉へて、こんな事を云つても、馬の耳に念佛で、薩張分らない。頓悟どころか、お客が急に氣が狂つたと騷ぎ出すであらう。日本の禪僧が作麼生とか、恁麼とか云つて問答するのは、恰度東坡が新橋柳橋の藝妓を相手にするやうなものである。それでどうして宗教が弘まるものか、たとひ弘まつても形式一方に流れて、正味の精神は拔けてしまうのは當然である。

明治の開化も、西洋の書物を、其まゝ國民に讀ませて居ては、到底今日のやうに發達しない。たゞ一部洋學者だけの階級に限られて居たらう。然るに三田の福澤翁を始め、平易の分り易い文章で、ドシ〳〵翻譯物を世に出したから、範圍を廣く、國民を敎化することが出來たのである。

ところが五山の僧侶は、飜譯を經ず、丸呑みであるから、少しも消化しない。

今の禪僧が矢張其餘弊を承けて、人の名までも明極(ミンキ)宏智(ワンシ)林虛谷(リンヒョク)など生噛(なまかじ)りの支那音で讀ませることになつて居る。不立文字の教が字音の末まで、習慣形式に拘泥するやうでは、到底本領を發揮することは出來ぬ。

秦の始皇は、古を是とし、今を非とする學者が世を亂すと云つて、之を生埋めにしたり、書籍を燒いたりしたが、書は姓名を記すに足るといふめられると活動力を失つて、手も足も動かなくなる。趙嘏の詩に『太宗皇帝眞長策、賺得英雄盡白頭』と云つた通り、唐以來の學者文人が、進士の及第に必血を絞り、七十八十の白髪頭を、本箱の中に突込んだまゝ、往生する者がいくらもある。慶柴舟も亦『明の太祖制義を以て士を取る、秦、書を焚くの術と異なるなし、たゞ明は巧みにして秦は拙なるのみ、其天下を愚にせんと欲するは則ち一なり』と云つて居る。今の清朝に至つても依然其政策を守り、科擧を以て、國民の活動力を消耗した。一昨年に至つて漸く科擧を廢したのは、清國人のため實に慶賀すべきことである。これから考へても支那の文字は、人の神を敝り、精を耗し、活動力を消磨するやうに出來て居るものだ。支那が今日老朽國となつて、瀕死の狀態に陷り、國民一般活動力のないのも、唐の太宗、明の太祖、康熙、乾隆の諸帝が、天下の士人を愚にして、其活動力を奪ふ政策が一々成功した結果である。支那文字の弊害も亦甚しい。

そこで人主の黜策を看破した聰明の人物は、不平の餘りに不立文字の禪に歸して、唐宋の間には、禪林に豪傑が多い。一時禪風が天下を動かし

たのも、そのためであらう。

更に一轉して學者文人の風流禪、文字禪となつて、自ら文字の束縛を受け、活動力を失つたが、禪を加味して成立した陸象山や、王陽明の學術は、他の儒教に比して、大に活氣がある。

されば日本の禪僧も、專ら其道を傳へて、其文字に拘泥しないやうにすれば、禪の活動力も猶持續することが出來たらうに、不立文字の教が、反つて文字のために困められ、弄ばれ、遂に其生命を失ふに至つた。

要するに禪は生死を透脫するより先に、權力富力を透脫しなければならぬ。

それが却つて文字語言の末に執着して、加ふるに權力富力のために驅使せられて居た五山僧侶に禪の活機のある筈がない。

五山僧侶は、文學技藝の方面に於て大功あるも、肝心の禪の精神は全く拔け殼で、たゞ形體を殘すばかりである。それは五山僧侶の著述を見て

も分る。虎關の濟北集なども、無用の閑文字ばかり澤山で、如何に精神氣力を消耗したものやら、慨笑すべき次第である。中巖の東海一漚集、義堂の空華集なども、大抵同じやうなものだ。それに比すれば雪村が、あれだけ詩が上手で、岷峨集の外別に著述のないところが、立派のものであらう。たとひ詩を作つても岷峨集などの詩は、心血の凝結したもので、單に文字の行列ではない。虎關、中巖、義堂などの詩文は、骨を折つて文字に使はれて居る。

尤も不立文字と云つても、決して文字を取扱つてはならぬと云ふことではない。古德の語錄類を讀んで、自己の修養に資し、自己の所懷を人に傳へ、後世に貽すには、亦文字語言を借らなければならぬが、其本末を顚倒して、本を忘れ末に趨るから、詩も偈も語錄も、鸚鵡的のものとなるのである。然し儒學でも禪でも、詩でも、支那のものは、研究を積めば積むほど、文字の奴隸となつて、精神を遺れ、形式に偏する弊がある。

これは學習し難い文字の罪であらう。

あゝ此の如くにして、足利時代の禪僧は徒らに文字の捕虜となつて、超脫することが出來ず、其精神を喪失し、其活動力を消耗し、纔かに娯樂的技藝の末に向つて、其機巧を弄することゝなつたのである。されは僧侶でも成るべく文學に遠ざかつて居るものや、戰鬪の餘暇に禪を修した武士などのほうが、向上的精神を持つて居た。

足利氏が亡び、五山も滅茶々々になつてから、禪はます〳〵武士の階級に向つて、活動の面目を現はした。

遊廓遊女對面圖

九れん面壁なんのその
煩惱菩提のふたすぢに
加へて三筋で日を暮し
客の相手に南無阿彌陀
それはあなたの御了簡

西有穆山

わたしや十年うきつとめ
わたしやまことの一筋を
絲がきれたらぜうぶつと
濟度なさるとなさらぬと
ほかに餘念はないわいな

第十三章

平民禪

解らないでも解つた顏……王侯將相豈種あらんや……慚愧今日
紫衣僧……頂門の一針……あみだはだか物語……探られぬ所が我
なり……一休の欠點……澤庵禪師……白隱禪師……消極的倫理

五山の僧侶が、室町幕府の奴隸となつて、徒らに貴族の鼻息を窺ひ、閑文字を弄んで、宗教家の本領を失ひ、上求菩提の向上的精神もなければ、下化衆生の慈悲心もない時代にも、多數の中には、之を憂ひて、別に平民的敎化の方面を開拓したものがある。

然し四角張つた文字で固めた古則公案や、宗乘語錄類を楯にして、金剛生鐵を嚙むとか、赤脚刀山に上るとか、紅爐上一點の雪とか、陳糞漢語を並べ立てゝ、解らないでも解つた顏をして居たものが、急に世話に碎

けて、權さん八さんを相手に、甚深微妙の法を授けるといふことは、頗る困難の仕事である。

此困難の仕事を、不完全ながらも行つて退けた者の代表者を誰かと云へば、彼の滑稽談譚、一世を玩弄して終はつたやうに云はるゝ一休和尚である。

一休の行ひは、尋常の軌道を逸して、今日でも氣狂ひ坊主のやうに思ふ人もあるが、要するに當時五山の僧侶共が、餘り儀式張つて、貴族の機嫌を取ることにのみ屈托し、宗教家の本領を沒却し、少しも平民的教化を顧みないのに、激するところがあつたのであらう。

一休は氣狂ひ坊主のやうに見えても、眞の氣狂ひではない。徒らに一世を玩弄したやうでも、平談俗語を以て、熊や八にも分り易いやう、佛教の何物たるを會得せしめやうと勤めたところは、宗教家の本分を知つたものと云はねばならぬ。

凡そ四姓の吾門に入る、皆釋氏を稱す、其食を與ふて命を資け、法を與ふて、姓を資くるを以て也、亦何ぞ貴胄望族これあらんや、今の世山林叢林の人を論ずる必ず氏族の尊卑を議す。

と喝破した語氣を察すれば、當時の僧侶社會は、身元詮索に及んで、尊卑の區別を立てたものと見える。外典にすら王侯將相豈種あらんやと云ふ事があるに、平等觀を根本義とする佛弟子にして、斯る有樣とは、當時の宗教界が如何に貴族的階級を重んじて居たかゞ分る。成程これでは、一休の肝癪に觸るも無理ではない。これから考へても、一休は謹法の心が、頗る厚いものであつた。

又彼が八十一歳の時に、朝廷の勅命を以て、紫野大德寺の住持たるべき恩命と、紫衣を賜はつたが、

大燈門第滅殘燈。難解吟懷一夜氷。五十年來簑笠客。愧慚今日紫衣僧。

と云ふ詩を作つて、生涯其紫衣を着用しなかつたところは、彼の道元禪師が『却つて猿鶴に笑はれん、紫衣の一老僧』と云つたのと、好一對の美談で、俗權に阿附し、榮耀に誇る恐僧共には、頂門の一針と云つて宜からう。又假名法語を作つて、

夫れ人間のあり樣、萬といまる事なし、もとより生のはじめを知らざれば、死の終りをわきまへず、やみ〳〵ばう〳〵として、苦の海に沈むなり、こゝを佛のあはれと思召て、色々の御方便にて、衆生を救ひたまふ、されども人間の心ふだうにして、惡道へあゆみをすゝめ、よき方へは心すゝみがたく、徒らに光陰を送り、六道あはれみの業果絶えず、たま〳〵をしへに從ふといへども、名利の善を爲すばかりなり、名利と申すは、其身の名をあげ、人にはめられ人とおもう心をたのしんで、堂塔を建立し、ときの富貴におごれり、かくの如くの人を佛は深くきらはせ給ふ、まことの道は萬事法度をそむかず、世にしたがいて、けんばうなる人を佛道にとやうとゆの人と申也

達磨が梁の武帝に對して、無功德と喝破した意味も此中に云ひつくして餘蘊なく、當時の將軍家其他貴族と五山十刹の俗僧共をして、此語に耳を傾けさせたならば、臨濟禪もあればこそまで墮落しなからう。或人が阿彌陀に就て教へを請ふた時に。

阿彌陀とは石の中の火の如し、此火は法界十方の虛空に滿々として、空却以前より有る火なり、縮まるときは芥子の內にも籠り、石の中にもありと雖も、目にも見えず、其石を探れども、熱くもなく冷くもなし、自ら現はれ出で、燃ることなく、又去つて消ゆることもなく、何時も絶へず有りて、鐵を合せば、忽ち火の現はれ出づるが如し、彌陀佛も法界の虛空に自然としてまします、空却以前より、いつも絶えずありて、來て現はれたまふこともなく、又去つてかくれたまふこともなし、名號を稱へ、眞實信心深き衆生の機の前には、來迎ありて、光明を照し

たまう、之を淨土と定めたまう云々、

と『あみだはだか物語』を書いて與へたところなどは、實に平民的敎化に適した資格技倆を持つて居る。之を五山の學僧とか何とか譽めらるゝ者が、碌々讀んでくれ手のない、四角張つた文字を行列させて、生涯の心血を絞り、精神を疲らし、空しく蠹魚の腹を肥やすに比すれば、其功德實に雲泥の相異である。且つ文章のすら〳〵として、今日の哲學博士とか文學士とか云ふ連中が、むづかしい符牒を、廻りくどく並べ立てゝ、大汗流して講義しても生徒に解りかねる宇宙の實體を、誰にも一讀して、成程と合點せしめるやうに、書き聯ねた手際は、實に巧いものである。之を氣狂ひ坊主だの、トボケ者だのと罵倒しては勿體ない。

是は是、非は非にしておき、生は生、死は死、花は花、水は水、草は草、土は土、我はこれ何者ぞ、何者ぞと頭頂より尻まで探るべし、探るとも探られぬところは我なり、

と云つた語などは、直截簡明で、如何なる唯物論者も、此一箭で急所を貫かれて居る。

心とは如何なるものを云ふやらん
墨繪にかきし松風の音

實に巧い〳〵、誰の手にも捉へやうのない心といふものを、ピタリと抑へ付けて、こんなものであるぞと見せたところは、實に妙不可儀の手段を持つて居るが、これは禪の妙旨を、十分に咀嚼し、まるで別物として吐き出したからで、五山の俗僧共が、支那の書物を丸呑みにしたまゝ、碌々消化しないで、こき出したのとは到底比較にならぬ。

釋迦といふいたつら者が世に出でゝ
多くの人をまよはするかな

佛に遇へば佛を殺し、祖に遇へば祖を殺す、快利の機鋒はこの一首にある。

世人はたゞ尋常の滑稽者流、氣狂ひ坊主を以て、此教界の一奇傑を目し、其書き殘したものも、たゞ笑ひの種として之を讀むから、何の得るところもないが、能く味つて見れば、禪の平民的教化として、それに勝つたものはない。尤も其行ひが稍放縱に失して、眞面目でないところは、一休の缺點である。狂雲集中に屢々見える森侍者の如きは、一休の寵妾であると云ふ事も傳へられ、當時禪僧として禁じられてある女犯、飲酒を憚らずに行つたといふことは、吾人も辯護の餘地がない。

想ふに一休は當時の宗教界にあつて、其形式的に流るゝを憤つて、故意と其反對の行爲に出で、奇矯に失したところがあるから、眞の高僧名僧の許を下すとは出來ないが、禪機の上から得來つた活動力は、平民的教化となつて、今日の世まで、兒童走卒も、一休和尚の名を口にするは、侮るべからざるところがある。これはどうしても權力富力に束縛せられ、文字のために、能々精神を消耗した五山僧侶の眞似らるゝところでない。

若し一休が、此方面に向つて、最う少し眞面目に開拓したならば、禪の活動力は、平民社會に於て、大に發達したらうが、惜しいことに其氣狂ひ坊主と見られたところが、十分に成功しない原因である。

それから世は漸次降つて、五山十刹も足利氏と共に衰微して、戰國時代を過ぎ、德川氏の世となり、講庵禪師の化導により、武士的方面に發展した。然し德川氏の武士教育は、儒學詩文に力瘤を入れた餘弊として、禪は本來の活動力がまだ幾分か殘つて、澤人を教化する僧侶が少ない。尤も曹洞宗で行はれた法問には、

『バッと立つた』

『忽ち兩翼を截られてはナント』

『中々、香の煙でさうらう』

と云ふやうに、至極世話に碎けた問答もあつたさうだが、まるで謎々の

やうで、其解らない程度は、漢語の陳糞漢と同じで、一休のやうに、巧く消化して居ない。

それで漸々元へ返つて『一劍天に倚つて寒し』『紅爐上一點の雪』などゝ解らない囈語を解つたらしい顏で問答するのであるから、眞の禪機を悟るとは出來ぬ。德川時代の禪も、斯ういふ調子で、少々青表紙でも拈つて、黃色い咳拂ひをする武士や富豪の消閑具であつた。

此間にあつて平民的敎化に勤めたのは、彼の白隱禪師である。

白隱は一休と異つて、眞面目の高僧であつて、平民的敎化に骨を折つたことであるから。道譽隆々として、今日の世までも、隨處に法孫を有し、德川三百年間第一の碩德として聞えて居るのである。

白隱の著述として漢文のものも多いが、藪柑子、御代の腹鼓、御洒落御前物語、於仁安佐美、安心ほこりたゝき、お多福女郎粉引歌、見性成佛

丸方書、大道ちよぼくれなど、何れも一休に倣つて、平民的敎化のために筆を執つたものである。これによりて禪の感化が、何程一般の國民に及んだか知れぬ。

白隱曾て『文章に耽る僧に示す』と題して

百千の諸佛は、心を以て師としたまへり。
身心を護惜して、影の隨かふが如くせよ。
韓柳が文章、たゞ世を駭すといへども
生死到來の時を、如何せんとかする。

と書いたことがある。これを彼の虎關、義堂の輩に見せれば、何と云ふであらうか。

明治の文明が、福澤翁の『學問のすゝめ』『世界國盡』『西洋事情』に負ふところが多いとすれば、一休、白隱兩禪師が、禪宗敎育を以て國民に裨益した事も、頗る多いであらう。

然し一休と云ひ白隱と云ひ、消極的倫理の一端を以て、國民を敎化するに努めて居る。殊に白隱は神儒佛三敎を、衝突しないやうに調合して、服從的義務即ち忠孝にばかり重きを置き過ぎる。當時の時代思潮として、止むを得ないことではあるが、これでは禪の活動力を、十分國民に應用させる事が出來ない。

されば今日以後禪宗として、平民的敎化に從事するものは、禪の活機を捉つて應用するやうに盡力して貰いたい。

病中の公案

病中の工夫に、三つの用心あり。

一には、死を極むべし。生死無常は、人間の定法、況んや道人をや。生死事大を以て、平生の受用とす。此故に病中には、先づ死を極めて、事に迷はず、身を介抱人にまかせて、安然として任すべし。

二には、息に依る。身心疲れて、行業及ぶべからず。身風の身內に解するを覺ゆ。是を諸法實相の境として、正念相續を誡むべし。

三には、願を勵ます。病若し治せば、益々心を改めて、行を勵まんと誓ひ。命若し盡きなば、日頃の大願の如く、大丈夫の身を受け、一聞千悟の人となりて、普く一切衆生を利益せんと誓ふなり。穴賢。

第十四章

武士道禪

武藝の極意……孔明馬稷を斬る……武士道と禪との相異點……亂臣賊子……兜中の二銃丸……我邦固有の倫理思想……禪と武士道と同一の弊……療我慢……鬼に金棒……利休の最後……名譽と禪

禪と武士道と云ふことは近來の流行語で、それに關した著書も、澤山出て居るやうであるから、今更茲に例証を擧ぐる必要はあるまい。然し一言して置くことがある。

武藝の極意といへば、心膽を練ること、生死を透脫すること、此以上は最早求むるところでない。而して其方法は禪の心要を得るのが、最も功を奏し易い。

されば禪といふことを少しも知らないでも、兵法武藝に錬達した人であ

れば、禪と同一致の修養を得たものであらう。

例へば禪悟の上に於て、一點の人情も假借する餘地がない。黃蘗が臨濟に『如何か是れ佛法的々の大意』と問はれて、三頓棒を喫せしめたのは、孔明淚を揮つて馬稷を斬つたのである。將は軍にあつて、君命も聽かざるところありとは、佛の平等觀に立つて、殺佛殺祖の見解を得た者と同じである。生死を透脫した後でなければ、義經も鵯越の逆落しに着手することは出來ぬ。皮を切らせて肉を斬れ、肉を斬らせて骨を斬れとは、劍法者の常套語であるが、これも生死一如と觀じた上で、應用すべきことである。

殊に禪は我邦に渡來した初めより、鎌倉武士に歡迎せられ、公卿禪の建武中興、琉石の足利尊氏に於ける、何れも武士と密接の關係があつて、五山の僧侶が活動力を失ひ、枯木死灰の如くになつて居た時代でも、良將勇士と云はるゝ人々は、禪の心要を得た者に多い。澤庵禪師が將軍家

光及び柳生但馬守に、禪の修業を以て、武藝の鍛鍊を助くることを敎へたのも、道理至極である。然し此處に禪と武士道と一致しない點がある。それは何ぞと云へば、眞如の平等觀から來る思想と、武士道の階級的思想である。武士道は君臣上下の分を嚴重に格守すべきものである。然るに禪悟に於ては、斯る差別階級のあることを許さない。

そこで或人は斯ういふ議論をする。鎌倉の北條氏が、陪臣を以て國命を執り、王室を蔑如したのは、禪の惡感化である。即ち平等觀の上から、上下の分を忘れたもの、イヤ忘れたといふより、心に惜むところがあつたからだ、さもなければ日本固有の倫理的觀念を破壞して、あれ程まで思ひ切つて京都を壓迫することは出來ぬ。足利尊氏が後醍醐天皇に叛いて、別に北朝を立てたのも、矢張北條氏と同じく、禪の平等觀から割出したものである。其他武田信玄が父を逐ひ、上杉謙信が兄を殺し、陶全姜、

明智光秀が其君を殺したのも、悉く同一の思想から出たものであると。果してさうとすれば、禪は亂臣賊子を製造する教へであつて、一日も我邦に存在せしむべからざるものである。

尤も宗教の感化は、非常の勢力を持つて居るので、三河武士と云へば、主君の馬前に討死するを以て、何よりの名譽と心得て居るものであるが、一向宗の騒動に、其門徒たる三河武士が、八方に割據して、主の徳川氏に弓を挽いた。此時は流石の家康も、非常の苦戰で、戰ひ終つて、兜の中から二個の銃丸を獲たくらいである。他力本願の一向宗すら、信仰の勢力は、三代相恩の主君に向つて、危害を加ふる程であるから、自力を以て、眞如の平等觀を會得したものは、大に恐るべきであらう。

されども我邦固有の倫理思想は、不思儀の大勢力を有つて居て、海外より侵入して來るものは、宗教でも學術でも、大抵之を同化渾融、國體を傷けないばかりでなく、却つて國體をして、一層鞏固のものとする。

儒教も支那にあつては、君を輕しとし、民を重しとし、君は民の爲めに立つるものとの思想が基礎である。湯武放伐を以て聖人の意に適つたものとすれば、無理のない事だ。然し我邦に入つては、そんな臭味は更にない。儒教の本家たる支那は、其弊を承けても、此方はます〳〵國體の精華を添へて居る。

佛教も種々の形式を以て、我邦へ侵入したが、何れも國體と抵觸するものはない。耶蘇教もまた其通りである。たゞ一人偶像を拜まぬと云つて一時物議を釀した内村某があつたが、これとて強ち國體と相容れないといふ大問題ではない。されば此後如何なる宗教が侵入しやうが、學說が流行らうが、必ず我國體のために融和せられて、其羽翼となる事はあるとも、決して抵觸することはない。然るに獨り禪ばかりが、さる危害の分子を含むことはあるまいと思ふ。

武士道の得失は、既に先輩が種々に論じてあるが、將來の事はイザ知ら

す、坤輿上の邦國が分裂して、猶弱肉強食の時代にあつて、互に軍備の擴張を競ふうちは、大に奬勵すべきものである(世間には一般の社會道德、人格問題までも武士道の範圍に入れて論ずるものもあるが、吾人の武士道と稱するは、最も狹き意味に於て用う)

武士道の弊は、從來形式に流れ、瘠我慢を張り過ぎるところにある。禪も亦同一の弊によつて、その本領を沒却して居る。兩者の抱合するときは、ます〳〵其弊に捲えない。こゝは大に注意すべきところであらう。

生死關頭を透脫するといふことは、無論武士道に必要であるが、我日本人は、祖先以來極めて勇敢なる氣質を養成せられて居るから、大事に臨んで生命を棄つるとを案外嫌はぬ。封建時代に於て、武士の切腹は名譽の事としてあつた。又近くは日露戰爭に於て、其例證はいくらもある。たとへ禪の心要を得ないものでも、日本魂といふ一種の瘠我慢は、日本人の特色であつて、其場合に臨めば、生命を棄ること鴻毛より輕しだ。

歐米人も之に就では、何とも解釋のしやうがあるまい。室鳩巢が。

花よりも、紅葉よりも、天下第一の見事なるものは、人の死に臨んで、從容として、潔きはどありがたきものは無之候

と『鳩巢小說』に書いて置いたが、日本人以外に斯ういふ氣質を持つて居る國民はない。

之に禪の心要を得て、生死透脫の觀念を得れば、錦上錦を添へて、鬼に金棒だが、生死の大事よりも、反つて平生に於て、禪の修養を得。之を應用して行くのが肝心である。

維新の際に、或ひは官軍となり、或ひは幕軍となり、山河百戰、九死に一生を得た人々が、今は貨殖のために眼を眩まし、種々の風評を受くるも、覗として顧みないものがある。此人々は生死を透脫することは出來ても、利慾の煩惱を離るゝことが出來ないのである。

これに就て最も適切の例を擧ぐれば、彼の茶仙と云はれた千の利休であ

る。彼が豊太閤の怒りに觸れて、生命を奪はれんとする時、

提ぐるわが悟具足の一つ太刀

今此時ぞ天になげうつ

と聲高く口吟んで、神色自若屠腹した態度は、禪の心要を得來つたものとして、後世の者まで歎賞するところである。堺の一賤賈たる與四郎の覺悟此立派の覺悟を以て居る利休が、何故名譽の奴隷となつて、豊太閤に阿附したか。何故三千石の俸祿に懇々として、早く地位を去らなかつたか、何故茶器骨董を、諸侯伯へ賣附けて不義の利益を得たか。こゝから考へると、生死を透脫するより、平生に於て人は名譽利慾を脫離することが困難である。

然るに世人普通の考へでは、生死一如と觀じさへすれば、武士道でも禪でも能事畢れりとして居るが、其平生を忘るゝ事は大なる間違ひである。

されば世の武士道禪を鼓吹する者も、こゝに注意して、生死を透脫する前に、日常の所爲に對し、心を點檢することを怠らぬやう、敎へて置かねばならぬ。

利慾を離るゝことは、武士道も禪も同一の理想を有つことが出來るが、名譽といふものは如何であらうか。從來武士道に於て最も重んずるところは、名を惜むの一點である。戰功の名譽を表彰すべき勳章を取上げてしまつたら、軍隊の指揮は頗る困るであらう。日本魂とか、日本男兒とか云つて誇揚するも、矢張一種の名譽である。

名譽は階級的の思想を基礎として出來たもので、武士道の生命である。之を棄てゝ禪の平等觀になれと云ふ事も、頗るむづかしい問題である。此點も大に研究しなければ、漫りに武士道禪を說くことは出來ない。

第十五章

結論

禪と活動

木偶と同じ……贅疣駢指……バッチルスと角力を取る……禪學盲妄……不生産的の人間……活動禪の最上乘

禪の體は靜である。禪の用は動である。凡て物は體のみあつて、用のないものは死物である。無用である。例へば人の胴體四肢も、形ばかりあつて、少しも働かなければ、木偶と同じである。

禪は靜慮して、宇宙第一義を了得するものであるが、之を了得しても、徒らに樹下石上に結跏趺坐するばかりでは、寧ろ了得しないはうが、優つて居る。

社會の人間が一人でも二人でも、斯ういふ死灰禪、枯木禪に墮して、土

塊巖石の如く、社會の用を仕なければ、社會はそれだけ損失をして居る道理である。

尤も支那では、歷代革命の際に、前朝の遺臣が、二朝に事へるを恥ぢて、山林に隱遁するものなどが澤山ある。斯ういふ人々は、枯木禪、死灰禪に墮するも、止むを得ないが、現今の日本では、決して之を容すべきものでない。

如何に悟道徹底したものでも、枯木寒巖に倚る、三冬暖氣無しと、一意閑寂を愛し、石佛のやうになつて居ては、社會から見れば、贅疣駢指である。

然るに禪と云へば、閑寂一味のものと誤解して居るものが多い。それがため厭世家とか世捨人とか云はるゝものが、爭つて之を修するやうな傾向がある。これはたゞ禪の體のみを知つて、禪の用を知らぬものである。唐の王維なども、地を掃つて香を焚き、全く世事を謝すとか何とか云つ

て、深く禪を修めたやうに褒められ、其詩は禪理より自得したなどゝ云ひ傳へてあるが、これは王維が多病で、活動力に乏しいためである。想ふに王維といふ男は、清癯鶴の如しとも云ふべき體質で、動もすれば北里博士の厄介になつて、コッホ氏の血清治療でも受けなければならぬ人物に相違ない。

從來禪でも修めて見やうと云ふ人物は、兎角此王維一流のパッチルスと角力を取つて居る、危險の體質を持つた者が多いので、何となく陰氣らしい方面へばかり引込まれる。斯ういふ人物は、たとへ大悟徹底しても、佛の慈悲心を以て、一切衆生を濟度しやうなどゝいふ大精進大勇猛の心は起らない。

何程悟つても、佛の慈悲心を以て、一切衆生を濟度すべき大本願を發さなければ、利器を礪いで、徒らに戸棚へ藏つて置くやうなものである。

白隱禪師が

悟りても下化衆生のこゝろなきは
魔道に落つと春日野の勅

と云つたも、こゝの心得を諭したものである。

大鹽平八郎が、大虛説を著はして、說くところ、禪と大同小異でありながら、禪學虛妄と喝破したのも、從來の禪が、病的厭世觀に陷ることを罵倒したのである。

今日は戰捷後の光榮ある日本として、武士道々々といふ聲につれても、禪學も其頭を擡げて來たのは喜ぶべき現象であらうか、厭ふべき現象であらうか。

其喜ぶべきは、數年來學生社會の流行物となつた厭世思想に代へて、たとひ皮相だけでも、斯道を研究する傾向となつた事である。頓悟の妙境に達せざるまでも、古則公案を拈り、古德の語錄類でも繙くうちには、多少得るところもあらう。

其厭ふべきは、從來世俗の見解で、奇言奇行を衒ひ、尋常の軌道に外れた事を以て、禪味あるものとする誤解より生ずる弊害。もう一つは禪を風流とか高尚とか、隱居的貴族的に考へて、學生は學校を休み、農民は鋤鍬を擲ち、商人は算盤を投げ出して、此處の參禪彼處の提唱と、可惜時間を潰して、浮かれ歩いた果が、不生産の人間となつてしまう事である。されば上求菩提、下化衆生の大導師たらん者は別として、普通の人でも自己の信仰さへ堅固であれば、坐禪の形式に依らないで暇のある時に端坐靜慮して、常識の上から自問自答すれば、其根機次第で多少得るところがあるに相違ない。さうして其所懷を自己の信ずる僧侶なり學者なりに示して判斷を請ひ、猶自ら確定し、日常の事に應用すれば、自然禪の活用を知る事が出來る。それが活動禪の最上乘で、彼の形式ばかりの坐禪を修め、鸚鵡的の提唱を聽問したところで、肝心の信仰心がお留守であれば、何の役にも立つものでない。

（竺乾正續宗門十勝論節略）　虎關

婆伽梵、涅槃に近て、摩訶迦葉に告げて曰く、我に正法眼藏、涅槃妙心あり、汝に付與すと、幷せて阿難に勅す、副式傳化して、斷絕せしむるなかれと、此事頗る涅槃經及諸書に見えたり、曾來商那和修、優婆毬多、提多迦、彌遮迦、婆須蜜、佛陀難提、伏駄密多、脇尊者、富那夜奢、馬鳴、迦毘摩羅、龍樹、伽那提婆、羅睺羅多、僧伽難提、伽耶舍多、鳩摩羅多、闍夜多、婆修盤頭、摩奴羅、鶴勒那、師子、婆舍斯多、不如密多、般若多羅、菩提達磨、二十八世、付法藏經及び禪經に列する所皎如たり云々

明治四十年十二月十八日印刷
明治四十年十二月廿一日發兌

不許複製

定價金四拾五錢

著者　破魔禪
發行者　伊東芳次郎　東京市本郷區本郷一丁目九番地
發行兼印刷者　伊東靜子　東京市京橋區三十間堀二丁目四番地
印刷所　凸版印刷合資會社　東京市下谷區二長町一番地
發行所　東京市本郷區本郷二丁目　電話下谷一[illegible]　郵便振替貯金口座一[illegible]　東亞堂書房
發行所　東京市京橋區三十間堀二丁　東亞書院

禪と活動畢

東亞堂發行圖書大賣捌所

東京市下谷區中根岸七十五番地　小林嵩山房
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文館
大阪市東區南本町座摩前筋南入西側　杉本書店
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社　積文社

東京神田　上田屋
東京京橋　前川書店
東京日本橋　至誠堂
東京日本橋　北隆館
東京京橋　東海堂
東京日本橋　林平次郎
東京日本橋　文林堂
東京神田　武藏屋
大阪[illegible]橋筋　松村文海堂
京都寺町二條　若林書店
京都二條通河原町　寶文館支店

神戸元町　寶文館支店
名古屋本町　川瀬代助
名古屋宮町　星野文星堂
名古屋鐵砲町　三輪玉潤堂
福岡縣久留米　菊竹金文堂
福岡縣博多　博文社支店
熊本縣熊本　長崎書店
大分縣大分市　甲斐治平
廣島縣廣島市　積善館支店
高知縣高知市　宮脇開益堂
和歌山縣和歌山市　宮井宗兵衛

（其他全國著名書林）

大內青巒居士序　釋　悟庵師著

新刊　禪と修養

大判全一冊
定價四十五錢
郵稅六錢

古來修養の方法として禪の卓効あるは世已に定評あり、然かも近時參禪入室せるの徒の、往々にして常軌を逸し、日常の大事を閑却して、徒らに出世間的の行爲を以て得たりとなす者多きは、豈寒心の至りならずや、悟庵師深く此禪病の怖るべきを憂ひ、大悲の鐵槌を揮つて、禪と修養との關係を喝破し、以て解脫悟道の正門に導かんとす。苟も禪の眞面目を知りて、修道の針路を過まらざらんと欲せば、來つて本書の濟度を受けよ。

好評八版

動中靜觀

在米國茅原華山君著

渡邊國武氏題詞　三宅克己氏畫
黒岩周六氏贅論　齋藤松洲氏畫
佐々木信綱氏題詠

華山先生の文は世既に定評あり西園寺陶庵侯は『恰も蘇老泉の文を讀むが如し』と稱せられ渡邊無邊老俠は『山淺間、物產生絲、湖水硯訪、文章華山、武官藏島』と謳はれ而して黒岩涙香先生は實に『其趣味の博きこと時人及ぶ者少し』と贊論せられたり本書は先生が半生の思想史にして又觀察史也篇を分つこと八其趣味の多樣なる其文詞の流麗なる近時出版界の一異彩たり敢而大方の瀏覽を俟つ。

▲洋裝全一冊…三百二十餘頁…定價四十錢…郵稅六錢▼

好評時文評論

德富蘆花君序

理趣情景

角田劍南道士君著

健實の想、莊麗の文、現今文壇評論家の泰斗として、よく理を盡し、情を察するものは、實に我劍南道士に非や本書は君が、社會、文藝、思潮、人物等に關する獨特の評論に、自然、人生、美術、哲理等に對する隨時の感想文、美文等を加へ、風雲の氣、兒女の態兩つながら併せ得たるものにして、近時文壇の大勢を知らんと欲する者の看過すべからざる快著也。

▲洋裝全一冊…体裁閑雅…定價四十錢…郵稅六錢▼

好評再版

宮內大臣田中光顯氏題字
子爵　渡邊國武氏手簡
故　原抱一庵氏序

賜天覽　瑤琴

龜谷天尊君著

本書は天尊龜谷氏が、其該博超凡の識を以て、宇宙の萬象を達觀し、ろが胸裡の琴線に觸れて流露せし筆の跡を、輯めて高雅なる一冊子となし長くも　聖上　皇后兩陛下乙夜の覽に供し奉りたるものにして、詩歌あり、紀行あり、漫錄あり、日本新聞は「苟も天尊を知らんとするものは必ず一讀すべき文字なり」と稱し、毎日新聞は「讀者をして感殆ど窮りなからしむ」と言ひ、一二六新聞は「野趣饒き文字もありて頗る多方面なり」と評せり。

▲袖珍全一冊…五百餘頁頗美製本…定價四十五錢…郵稅六錢▼

文學士武島羽衣君序

好評再版

作歌の栞

志賀華仙君著

慶應義塾普通部國文科教師

武島先生の序に曰く『細やかにして煩はしからず、心得易くして卑しきに流れず、この道の隱々人の迷ふべき所々を說き明らめたるは、げにをぼろげならぬいたづきとやいはまし』と、又讀賣新聞は『敘述簡略初學者の好參考書也』と評せり。

▲新形全一冊…体裁優美…定價貳拾五錢…郵稅四錢▼

新案

百人一首通解

東京開成中學校囘語及漢文講師

佐藤仁之助君著

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえれ順に排列し、ごくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本！年末歲首の御進物用なぞには、外に類なき適當品です。

▲全一冊壹百餘頁……定價十錢……郵稅參冊迄貳錢▼

新刊

日本文法解義

東京開成中學校講師國文法專攻

佐藤仁之助君著

●本文六號活字最新式印刷●

本書は佐藤先生が、從來文法書の徒らに多岐多樣にして煩瑣にのみ流れ、善く要を撮り、綱を携げ、一讀直ちに其要領を會得して實際の活用に資するもの鮮きを慨し日清敎授上の實驗を基礎とし數年間に溯りて慘憺の經營を費されたる結果從來に類例なき新式を以て編纂せられたる新著にして且附するに各種專門學校入學試驗問題幷に敎員檢定試驗問題を以てし一々其解答の方法を示されたれば之を受驗準備の參考書として、將た又中學上級及び補習用等として參考せらるれば勞少くして得る處必や多きを得む。

▲洋裝全一冊……紙質佳良……定價四十五錢……郵稅四錢▼

破魔禪君新著

近刊 **偉人修養史** 全一冊(起稿中)

堀内新泉君新著

近刊 **發奮の動機** 全一冊(起稿中)

黑岩周六君序

增補十版

冥想論

附 坐禪論

加藤咄堂君著

戰後我國は一躍世界の大舞臺に一大蹈歩を試み、國民品性の修養を要する今日より急なるはなし、本書は著者が該博の識と流麗の筆とを以て、品性修養の根底たる冥想を各種の方面より論究し、獨坐靜思の快感を說きて、其理論と方法とを詳叙し、進んで禪の奧秘を闡明して、膽力養成の法に及ぶ。加ふるに冥想雜感の一篇は、實に君が半生の思想史とも稱すべき物にして、奇想縱橫、趣味滿幅世の修養に志あるの士本書を讀まば曉晤する所必や大ならむ

▲菊判全一冊…新式美術的製本…定價五十錢…郵稅六錢▼

幸田露伴君序

高評再版

冥想雜感 朝思暮想

加藤咄堂君著

朝に思ひ、暮に想ふ。朝に思ふの時には希望のほゝゑみあり。暮に想ふの時、誰か追悔の涙なからむ。本書は咄堂加藤氏が、行住の間、冥想の餘、事に屬し、物に擬し、深刻の同情と、高遠なる理想とを寓して、吾人が修養處世の妙諦を指示せられたる物。其詞藻の華麗なるは、燦として宛かも百花の芳を競へるが如し。之を現代文章の模範と稱すとも亦溢美の言にあらじ。苟も文を談じ、修養を口にするの士は坐右一本を備へざるべからず。

▲金二冊…定價各冊卅錢…郵稅各冊四錢…合本上製七十五錢…郵稅八錢▼

新刊

加藤咄堂君著

奇聞逸話 話し草

本書は加藤先生が吾人が趣味性の啓發を旨とし、其該博超凡の識を以て、古今に亘り、東西兩洋に及びて、興味ある諸種の奇聞逸話を輯集し、之を行るに君が輕快渾逸の筆致を以てせられたるものにして、一讀抱腹絕倒に堪へざらしむるものあり、肅然として襟を正さしむるものあり、又凜然として中夜馬を天山に驅るの志を起さしむるものあり、娛樂の裡に教訓を與へ、談笑の間に天來の氣呵に觸れしむ。人格修養の餘師として又文章演說の材料として將た又社交の談柄として眞に机上の好友、袖中の清涼劑たるに背かず。

▲袖珍全一冊…体裁瀟洒…定價　錢…郵稅　錢▼

好評八版

動中靜觀

在米國茅原華山君著

渡邊國武氏題詞　三宅克己氏畫
黒岩周六氏贊論　老泉の文を讀むが如し』と稱せられ渡邊無逸老俠は『山淺
佐々木信綱氏題詠　齋藤松洲氏畫

華山先生の文は世既に定評あり、西園寺陶庵侯は『恰も蘇
間、物産生絲、湖水評訪、文章華山、武官福島』と謳は
れ而して黒岩涙香先生は實に『其趣味の博きこと時人及
ぶ者少し』とにして又觀察史也篇を分つこと八其趣味の多樣なる其文
詞の流麗なる近時出版界の一異彩たり敢而大方の瀏覽を
俟つ。

▲洋裝全一冊…三百二十餘頁…定價四十錢…郵稅六錢▼

好評再版　時文評論

理趣情景

角田劍南道士君著

健實の想、莊麗の文、現今文壇評論家の泰斗として、よ
く理を盡し、情を察するものは、實に我劍南道士に非や
本書は君が、社會、文藝、思潮、人物等に關する獨特の
評論に、自然、人生、美術、哲理等に對する隨時の感想文、
美文等を加へ、風雲の氣、兒女の態兩つながら併せ得た
るものにして、近時文壇の大勢を知らんと欲する者の看
過すべからざる快著也。

▲洋裝全一冊…体裁閑雅…定價四十錢…郵稅六錢▼

好評再版　賜天覽

瑤琴

龜谷天尊君著

宮內大臣田中光顯氏題字
子爵渡邊國武氏手簡
故原抱一庵氏序

本書は天尊龜谷氏が、其該博超凡の識を以て、宇宙の萬象
を達觀し、ろが胸裡の琴線に觸れて流露せし筆の跡を、
輯めて高雅なる一冊子となし畏くも　聖上　皇后兩陛下
乙夜の覽に供し奉りたるものにして、詩歌あり、紀行あ
り、漫錄ありて、日本新聞は「苟も天尊を知らんとするも
のは必ず一讀すべき文字なり」と稱し、毎日新聞は「讀者
をして感殆ど窮りなからしむ」と言ひ、二六新聞は「野趣
饒き文字もありて頗る多方面なり」と評せり。

▲袖珍全一冊…五百餘頁頗美製本定價四十五錢…郵稅六錢▼

文學士武島羽衣君序
好評再版

作歌の栞

東京開成中學校國語及漢文講師
慶應義塾普通部國文科教師
志賀華仙君著

武島先生の序に曰く『細やかにして煩はしからず、心得易
くして卑しきに流れず、この道の隈々人の迷ふべき所々
を說き明らめたるは、げにをぼろげならぬいたづきとや
いはまし』と、又讀賣新聞は『叙述簡略初學者の好參考
書也』と評せり。

▲新形全一冊…体裁優美…定價貳拾五錢…郵稅四錢▼

新案

百人一首通解

佐藤仁之助君著

東京開成中學校講師國文法專攻

◉寸珍新形体裁典雅◉

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえお順に排列し、ど
くわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦
和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本一年末歲
首の御進物用などには、外に類なき適當品です。

▲全一冊壹百餘頁……定價十錢……郵稅參冊迄貳錢▼

新刊

日本文法解義

佐藤仁之助君著

東京開成中學校講師國文法專攻

●本文六號活字最新式印刷●

本書は佐藤先生が、從來文法書の徒らに多岐多樣にして煩
瑣にのみ流れ、善く要を撮り、綱を携げ、一讀直ちに其要領
を會得して實際の活用に資するもの鮮きを慨し日常教授
上の實驗を基礎とし數年間に溯りて慘憺の經營を費され
たる結果從來に類例なき新式を以て編纂せられたる新著
にして且附するに各種專門學校入學試驗問題幷に教員檢定
試驗問題を以てし一々其解答の方法を示されたれば之を
受驗準備の參考書として、將た又中學上級及び補習用等と
して參考せらるるなれば勞少くして得る處必や多きを得む。

▲洋裝全一冊……紙質佳良……定價四十五錢……郵稅四錢▼

東京開成中學校國語及漢文講師
佐藤仁之助君著

受驗參考
國語漢文要語詳解

◉合本特製 定價壹圓 郵稅十二錢◉

本書は文學博士黒川眞頼先生の高足として、國語漢文言語學等の造詣深き佐藤仁之助先生が、從來東京開成中學校に在りて、本科目の教鞭を執らるゝ傍ら、多年の實驗に基づき、各高等學校試驗問題及び教員檢定試驗問題等を參酌して、中學程度より以上各種專門學校入學受驗者教員檢定受驗者諸君等の參考に供せむため、特に數年の歲月を費し、博く各書を涉獵して單語、成句、故事、熟語等の中、須要難解の語句を採り一々明快なる解釋を下されたるものなり、殊に國語之部の如きは、意義の解釋上必要なりと思はるゝものには其語原を註記し、尙其意義の變遷あるものは條を分ちて註釋し、更に一々書冊に徵して其文例を揭げ、且梵語等の外來語より轉じたるものにはすべて羅馬字を挿入して原語の發音を明にせし等、其用意の周到なる、從來江湖に散在せる此種の書類中未だ嘗て其比を看ざる處なり、又每語の排列は之をいろは順にして、幼時より『いろは歌』に慣らされたる學生諸子の索出に便し且別に五十音順索引をも附して、兩者孰れにても容易に搜索するを得らるゝが如き、如何に其便益の好著なるかを知るに足るべし。

▲國語の部……全一冊三百八十餘頁……定價四十錢……郵稅八錢▼
▲漢文の部……全一冊三百廿餘頁……定價卅五錢……郵稅六錢▼

東京開成中學校國語及漢文講師
好評再版
佐藤仁之助君編
漢字異同辨及用法

本書は同訓或は同音にして其意義を異にする漢字の異同を辨じ、進んで一々用例を示して、懇切に應用法を說きたるものにして世の操觚の業に從へる諸君は勿論、日常作文の參考書として、萬人必携の寶典也。

▲寸珍クロース洋裝全一冊二百四十頁定價貳十錢郵稅貳錢▼

東京開成中學校國語及漢文講師
佐藤仁之助君校補
增訂參版
國語異同辨
附假字用法及誤り易き動詞語尾區別表

東亞堂編輯所編

本書は國語の中に於ける同字同音の語句或は相似の文字にして其意義を異にするもの數千言を對照し一々懇切に其異同を辨じたるものにして斯學に於て堪能の聞え高き佐藤仁之助先生の嚴密なる校補を經且つ同先生の新案に成れる便利なる假字用法及動詞語尾區別表を附したれば國語研究者の參考として有益無比の良書也

▲寸珍全一冊……壹百九十頁……定價拾五錢……郵稅貳錢▼

◉假字用法及誤り易き動詞語尾區別表 全一冊 此表のみ御入用の諸君には定價六錢郵稅八部迄貳錢也

文學士佐々醒雪君序
好評七版
俳句講語
文學士沼波瓊音君著

俳句は如何にして作るべきか、俳句は如何にして味ふべきか、抑も俳味なるものは果して那邊に存するや。本書は此等一切の問題に趣味饒き解案を與へ、以て乾燥せる現時の人心に一味の清風を點せんとす。何人と雖ども案頭一本を缺くべからず。

▲小杉未醒君 裝幀 美裝全一冊…定價四十錢 郵稅六錢▼

文學士久保天隨君序
好評二版
俳句研究
文學士沼波瓊音君著

本書は俳句の研究たると同時に、自然の研究也、美の研究也、又人生の趣味教育也。著者が筆鋒の觸るゝ所、物皆油然として俳趣を生ず。俳人たると然らざるとを問はず、一本を繙いて、津々たる十七字詩の美漿に醉へ。

▲俳句講話同裝…美本全一冊…定價四十錢…郵稅六錢▼

高濱虛子君新著
近刊
俳諧趣味

近時著述界の弊竇は、餅屋にして酒を售り、酒屋にして、菓子を鬻ぎ、唯汲々として其賣上高の多からむ事をのみ競ふの風が見える、であるから、實質に富んだ趣味の豊かな、眞摯にして恐永な、好著の鮮いのも、無理はない處が本書は現今ホトヽギス派俳壇の雄鎭として、多年斯道の造詣深き虛子君が、其最專門とせらるゝ、俳諧趣味を說かれたのであるから、天下此位適當した事業は、實に他にあるまいと思ふ。サツカリンの交つた餅屋の菓子に胃腸を痛め、如何はしい瓶詰正宗に頭を惱めて御座る方々は、早く此餅屋の今坂、正眞正銘の正宗を味つて俳趣味の醇雅な滋味に舌鼓を打ち給へ

▲袖珍全一冊…裝幀風雅…定價…郵稅▼

幸田露伴君著

好評三版 小說 はるさめ集

◎本書の內容

一口劍 三篇。風流佛 十二段。みれん 五章。

本書收むる所の三卷、悉く之れ明治文學史上特筆牢記すべき希世の名作たるは世已に定評あり。而かも刊本夙に絕ねて其得易からざるを憾みとし、乃ち先生に請うて合刻す。今や參版成る、文壇の欽陷今日より完たからむ。

▲大判全一冊…希有の美裝…定價七十五錢…郵稅八錢▼

幸田露伴君著

好評三版 潮待ち草

阪井紅兒君畫

潮待ち草は露伴先生の隨筆也、自然觀也、人生觀也、はた社會百般の事物に對する觀察錄也。詩を談じ、文を品し、史を論じ、處世を說きて、眞に他の企及すべからざる妙趣あり。以て品性修養の資とすべく、以て後進文を學ぶの範とすべし。附錄『土偶木偶』の一篇も亦先生が近作小說中の白眉たるもの、敢て文藝を愛好するの士の淸鑒を俟つ。

▲大判全一冊…裝釘最優雅…定價八十五錢…郵稅八錢▼

近刊

幸田露伴君新著

賴朝

阪井紅兒君裝幀

英雄由來風流事に富む。而かも我『賴朝』の情話の如く波瀾、曲折の妙を極めたるは、蓋し罕なり。露伴先生夙に頭大公が情の半面に心を潛めらるゝと久しく、博參考證遂に斯の一篇を成す。燃ゆるが如き靑春の戀に惱める英雄の俤は、當代の文豪が靈犀の詩筆に依つて讀者の眼前に躍如たらむ。當に之れ近時文壇の一大偉觀！

▲大判全一冊…空前の綺裝…定價…郵稅▼

幸田露伴君著

好評再版 註釋 二日物語

沼田頴川君註

二日物語は露伴先生が、傑作中の翹楚たり。今其全文を引きて精到なる註釋を加ふ。『此一日』の何ぞ悲慘なるや、渾身是れ詩の權化たる西行法師の心胸を活寫せし此一大名篇は、本書に依りて更に讀者と近親の便を加へたるものと稱すべし。

▲全一冊總クロース…金文字入美裝…定價四十錢…郵稅四錢▼

野口米次郎君著

好評三版 邦文 日本少女の米國日記

阪井紅兒君畫

ヨネ、ノグチ君の『日本少女の米國日記』は、實に吾人同胞の、以て世界文壇に誇示すべき、一大珍書にあらずや。而も原文は么意幽婉、舞文構想の妙を極たるを以て、歐文に精通せるの士を以てして、猶且つ解讀に苦しむもの尠なからざるは、眞に隔靴搔痒の嘆なくんばあらず。君また夙に之を感みとし、茲に自から邦文を以て本書を譯出せらる。婢婷窈窕たるわが朝顏嬢は、今や嫣然たる嬌笑を湛へて、讀書の面上に秋波を送りつつあるに非ずや。果して彼女と交歡の情を交ゆるの果報男や抑も誰ぞ？

▲大判全一冊…洋風美術的製本…定價七十五錢…郵稅八錢▼

秋元蘆風君譯

獨逸詩粹 シルレル詩集

詩聖シルレルの傑作中、『ヘロー、レアンデル』以下著名なるもの八篇を採り、獨逸文學に精通せる秋元蘆風君が、慘憺たる經營を費して、邦詩型に譯されたるもの、蘆風君の詩や、麗藻彬々として、氣韻頗る高く、眞に鸞歌ひ、鳳舞ふの慨あり、原詩の妙想と相俟つて、一誦恍惚たるの思ひあり。

▲袖珍新形全一冊…挿畫七葉…定價四十錢…郵稅四錢▼

外國語學校教授 山口小太郎君序

新刊 シルレル研究 鐘の歌評釋

秋元蘆風君著

本書は獨の詩聖シルレルが、冶工の大鐘を鑄るに擬して、幽玄微妙なる人生の奥秘を譬へる一大詩篇にして、詩聖が代表的の名作たるは已に定評あり。著者秋元蘆風君は、シルレルの研究に於て造詣深きの士、今茲其積年の蘊蓄を傾注して、本書を公にす。由來難解を以て稱せらるる『鐘の歌』も、君が透徹明快なる評釋によつて、一讀又た迎へて釋くるの慨あらん。苟も獨語の研鑽に係れる諸君は勿論、獨逸詩壇の明星たる千古の詩聖シルレルを解せんと欲するの士は、亦必ず本書を一讀せざるべからず。

▲洋裝全一冊……金文字入美裝……定價七十錢……郵稅八錢▼

在米國 茅原華山君著

高評再版 世界文明推移史論

本書は筆を東北と九州に起し、日本海岸と太平洋岸諸國の論評より、亞細亞文明の東漸を論じては儒教と佛教の批評となり、歐洲文明の西漸を論じては希臘羅馬の文明及基督教の批判となり、歐洲の衰運、米國の勃興、日本文明の西漸な說きて朝鮮支那露國等の國俗民情に及び、博く地理學、史學、人種學等に亘り、歐亞兩文明が各東西に推移せし史上の事迹を詳論して、日本の眞價及日本の世界に於ける關繫的位置を發見し、以て我大和民族の天職の存する所を指點す、眞に吾人同胞を啓發すべき一大史論也。

▲菊大判全一冊……貳百五十餘頁……定價五十錢……郵稅八錢▼

大日本催眠學會 會長小野福平君著

催眠術治療精義

（大日本催眠學會藏版）

本書は、大日本催眠學會々長として、本邦催眠術研究家の先覺者たる小野福平先生が富贍なる學識と、多年の實驗とを基礎として、博く東西の學說を參酌して、筆を催眠術の原理を起し、心理學、生理學、腎學等の根底より催眠術を以て治療し得べき諸種の疾病の病理、症候、經過、治療法等を說明せられたる催眠學界空前の大著にして催眠術研究者は、勿論、醫家經世家等の苟も看過すべからざる良書也。

▲菊大判全一冊……金文字入洋布美裝……定價六十錢……郵稅八錢▼

鼎立社發兌書籍

ドクトル富士川游君序

新刊 科學より見たる 男女の關係

前宮崎縣師範學校講師 澤田順次郎君著

本書は千古の一大疑案にして、然かも亦千古の一大疑問たる、男女兩性の差異を研究し、冷靜なる科學の立脚地より、兩性が赤裸々の眞相を暴露して、戀愛研究の必要を唱道し、男女各任務の分業、生殖の意義、色慾の害毒等を說きて、男女兩性をして各其本分を自覺せしめ、以て頽敗せる現時の社會風敎に一大痛棒を加ふ、男女孰れたるを問はず、必ず一讀の要ある快著也

▲大判全一冊……密圖數葉插入……定價卅五錢……郵稅四錢▼

藤田長江君著

近刊 福澤翁言行錄 全一冊《印刷中》

▲十一月下旬發賣

臼田石楠君著

新刊 西鄕南洲言行錄

西鄕南洲翁の人格は恰かも富嶽の秀麗なるが如く崇高也。其一言一行の如何に吾人を啓發し、發奮せしむるの深大なるや言を須ひず。此不出世の巨人が偉大なる感化力に觸れて以て、自己を鍛鍊し修養せんと欲するの士は乞ふ本書を繙いて再讀三讀する所あれ。

▲大判全一冊……洋裝精美……定價六十錢……郵稅八錢▼

發賣所 東亞堂書房

加藤咄堂君著

好評四版

人格之養成

夫れ大なる人格を有せざるもの、奚んぞ世に立つて光輝ある偉業を成就し得べけん。本書は著者が熱烈なる同情の筆を揮つて人格の根柢を闡明して、常識の涵養、趣味の啓發、意志の鍛錬等を說き、平凡を化して偉大ならしめ、儒弱を轉じて崇高ならしむ。眞に吾人が向上の新福音也。

▲菊判全一冊…體裁清雅…定價五十錢…郵稅六錢▼

堀内新泉君著

再版

人格と運命

あゝ運命の寵兒たるべきか、將た運命の繼兒として永く逆境に沈淪すべきか。偖夫は運命に盲從し、偉人は運命を自造す。天命是ならざるに非ず、唯自ら之を是ならしめざる而已。本書は日常實際の問題を基礎として、人格と運命との關係を詳叙し、千挫不屈の大精力を與へて、以て世に處するの新活法を說く、人格修養上速に一讀を要すべき好著也。

▲菊判全一冊…體裁高尙…定價五十錢…郵稅八錢▲

堀内新泉君著

近刊

時間の活用

『汝生命を惜しむか、然らば時を空費する勿れ、時は生命の原質なれば也』とは、是れ西哲の金言にあらずや。然り時の貴重なるは實に黄金如きの比にあらず、人生の榮辱、事業の成否、係りて時間活用の巧拙如何に在り。本書の吾人人類を益する眞に甚大なるものあらん。此書を繙くこと一分時を後れらるゝの諸君は、遂に千秋悔ゆる も及ばざるの損失を招き給はんや疑ひを容れず。

▲洋裝全一冊…體裁…定價…郵稅▲

加藤咄堂君新著

近刊

雄辯法

加藤咄堂君の演壇に立つや、抑に二十餘年、今は君の大名を耳にする者、檢忽として、そが神髓抑揚に富める縱橫の辯と、莊重にして一種人をして感奮せしめずんば已まざるの聲音とを聯想せざる者なし、君の如きは蓋に雄辯術の神に入れる者と稱すべし。本書は君が其多年の實驗と修辭學、聲音學等の原則を基礎として、思想排列法、言語撰擇法、演說組立法、聲音使用法、演說の態度、要項の心得等に亘り演說、講話、座談等の要訣を詳述せられたるもの。君にして雄辯法を說く、以て其郷黨の俗禮に非ざるを知るべし、苟くも志を當世に存するの士は、速かに本書を購いて、文明的思想表彰術の眞利益を享受し給はんことを。

▲大判全一冊…二百餘頁……定價五十錢……郵稅八錢▼

漆山又四郎君著

近刊

腦力養成法

文明の戰爭に智力の戰爭也。詩人たり、學者たり、學生たり、教育家たり、事務家たり、實業家たるとに論なく、優勝劣敗の岐るゝ所、一に腦力の強弱如何に關す。腦力の養成豈忽諸に附すべけんや。著者漆山君は刀圭の學に於て造詣深きの士、近者世人の腦神經衰弱其他腦の病症に腦める者多きに慨し、其積年の蘊蓄を傾注して、生理學、醫學等の根底より、腦力の使用法、睡眠時間長短の得失、有効なる腦の休養法、腦力增進の原理方法等を說き、進んで諸種の腦病の治療法を詳示せらる。而かも文辭暢達、之た行るに旨文一致体を以てし、人をして讀了せしむるの妙あるは、更に本書の特色とする所也。何種の職業たるを問はず、苟くも競走場裡の優勝者たらんと欲するの士は、必ず一讀の勞を吝むべからず。

▲洋裝全一冊……總振假名付……定價……郵稅▲

洪嶽釋宗演師贊語
渡邊無邊俠禪題詞

新刊

禪と活動

破魔禪君著

古來英雄豪傑の、克く死生の巷に出入して、尙且つ泰然として所謂電光影裏斬春風底の大勇斷を能くし得るもの、悉く之れ禪機より得來れる鍛錬の結果に外ならず。宜矣近時軍人政治家等の參禪工夫する者日に多きを加ふるもや。本書は禪の活機を悟得して、之を活社會の人事百般に應用するの道を示し、假令百難蝟集すと雖も、獅子吼一番、克く衆直に進前して退の道なきの大膽力を養成せしむ。與奪縱橫、生死透脫の大自在境に安住して、以て欲する所を行ひ、志す所を遂げんと欲するの士よ、乞ふ活眼を開いて此活書を讀め。

▲洋裝全一冊……体裁端正……定價四十五錢……郵稅六錢▼

再版

文學士 沼波瓊音君閲
四海庵 宮垣角人君著

俳味禪味

俳味とは如何？　禪味とは如何！　蓋禪味を解するの士にして亦始めて眞の俳味を談ずべし。本書は俳禪芭蕉によりて建設せられ、鼓吹せられたる俳味禪味の眞髓を明にして、『寂』趣味の福音を宣傳し、極端なる物質萬能主義に荼毒せられたる現時の人心に一大覺醒を與へ、以て虚飾を去りて簡易に就かしめ、枯淡の生活をして趣味を生ぜしむ。近時思想界の新革命兒たり。

▲小杉未醒君裝幀……全一冊頗風雅……定價四十錢……郵稅四錢▼

近刊

讀賣新聞記者 柳塘僊史君著

漢詩講話

附漢詩と俳句

漢詩は日本文學の根柢である、古來から文章でも、和歌でも、俳句でも、悉く漢詩の有力な影響を被らぬものは少しも無い。殊に俳句の如きは性質上漢詩の日本化したものと云ふても差支へない、と云はれるのが柳塘僊史君の持論である。漢詩とは如何なるもので、如何にして之を作り、且つ味ふべきものであるかとの問題を多趣多方面に解釋して、興味の裡に實益を與へ、漢詩と云ふ一問題の下に文學全體を知らしめると云ふのが即ち本書の特色である。

▲洋裝全一冊：體裁瀟洒…定價四十錢…郵稅六錢▼

新刊

楓村居士君著

俠雄錄

俠雄の豪快なる、佳人の悲壯なる、春夜の密談は蜜の如く、雪夜の情話は清きこと水に似たり、巨賊あり、怪窟あり、男か女か得て解すべからざるは小蓮にあらずや、毒婦の奸謀、惡吏の陰忍、嗚呼危い、哉東洋の老友邦！龍闘虎搏の活劇場裡に清風内地の珍習奇俗を知悉せしむるは是楓村居士が陋巷の實寫生帖也

▲阪井紅兒君畫大判全一冊……定價六十錢……郵稅八錢▼

新刊

高濱虚子 寒川鼠骨 君著
坂本四方太 長塚節 君著

新寫生文

◉本書の内容

夢の如し　四方太。
歸省雜事　鼠骨。
佐渡が島　節。
叙山詣　虚子。

本書は、現今文壇の異彩として一方に覇を稱せる寫生文派の中心たる前記の四君が、代表的作品各一篇を選み、戊申文壇に一新紀元を劃せられたるものにして、近時文界の一大潮流を知らんと欲する士の看過すべからざる名著也。

▲全一冊紙質佳良……体裁頗清雅……定價五十錢……郵稅六錢▼

近刊

東亞堂編輯所編

最近學校案内

全一冊(印刷中)

近刊

陸軍教授 理學士 藤田外次郎君閲
京華中學 校訪師 鹿田久村君編

最新科學講話

全一冊(印刷中)

324
61

東亞堂へ書籍を註文せらるるの便益

東亞堂は郵便振替貯金に加入仕居候間、御註文の節爲替料、郵便料、書留料等は勿論、封筒書翰用紙等なも費さるゝに及ばざる御便利有之候、葉書或は電話にて、御註文の書名、著者の姓名、冊數等御申越被下候へば、直に現品の有無、及其代價郵税、並に御送金の手續き等に關する委細の説明書御送附申上候

東亞堂は自店出版の書籍の外、各出版元と特約の上、博く内外の書籍を取揃へ、非常の薄利を以て販賣致し候間、何種書籍、如何なる書店發刊の圖書を不問、陸續御註文奉願上候

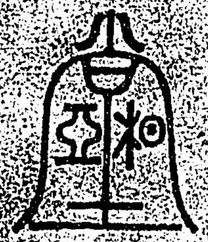
東亞堂は品切れ、又は自店に持合せなき品と雖も、御註文の節は諸方搜索、能ふ限り御便宜を圖り可申候間、何品に不拘御註文奉願上候

東亞堂は書籍に關する讀書家各位の御問合せに對しては、極めて懇切に、又迅速に御回答申上候間、必ず返信用郵券を添へ御照會被下度候

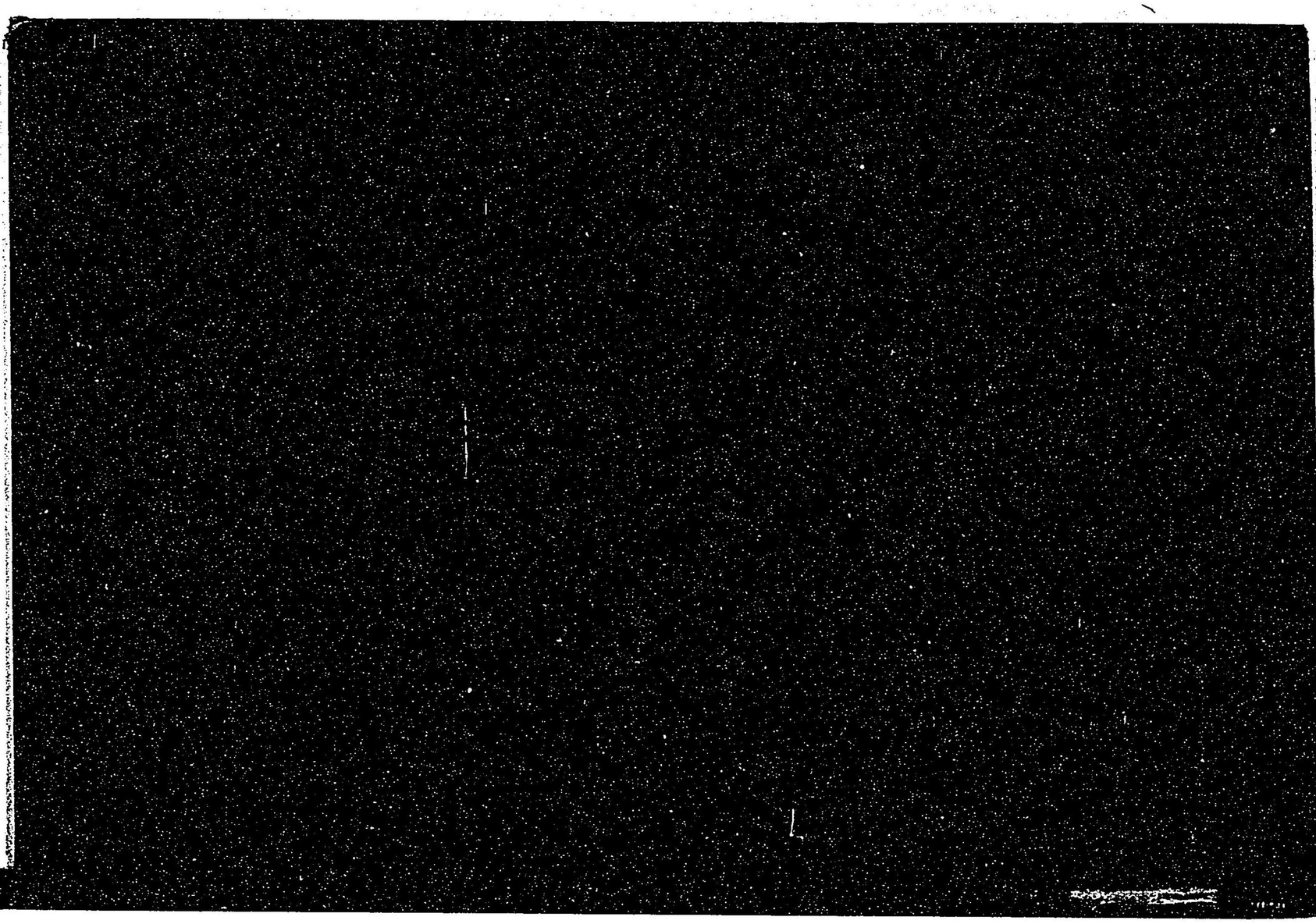
東亞堂は御註文品は多少に不拘、其部度敏速に發送仕候間、代價税郵共、必ず前金を添へ（郵便爲替なれば本郷一丁目郵便取扱所渡りに、郵券代用なれば一割増にて）御送附被下度候

東亞堂は更に出版部を擴張の上、奮て良書を發行致し益々讀書界に貢献仕度き微意に御座候間層一層御愛讀之程偏に奉願候

東亞堂へ書籍を註文せらるるの便益



324
61



324
61
Ⓜ

019631-000-7

324-61

禅と活動

掘内文二郎（破魔禅）／著

M40. 12

ABG-0411